アンケート「子どもはどのように本などを選び、読んでいるのか」報告

2023年6月

編集：児童図書館研究会

子どもと電子メディアを考えるプロジェクトチーム

目次

1. アンケート「子どもはどのように本などを選び、読んでいるのか」について 5

1.1 調査の概要 5

1.2 回答の内訳 5

1.3 アンケート調査のまとめ 6

2. 年代別に見た調査の結果 8

2.1 乳幼児編 8

2.1.1 どのように選ぶか 8

① 表紙で選ぶ 8
② 知っているものを選ぶ 8
③ 好きな本を選ぶ 8
④ 自分なりの手掛かりで記憶の本を探す 10

2.1.2 どのように読むか 11

① 五感で楽しむ 11
② 本を通してのコミュニケーションを楽しむ 11
③ 繰り返し読む 13
④ 絵を読み取ろうとする 13
⑤ 本の登場人物の行為を思わず実際にやってみる（読み聞かせ中） 13
⑥ 本の言葉に反応して模倣（まね）する・内容にふさわしい行動をとる 13
⑦ 本との対話 14
⑧ 読み聞かせから絵本の言葉を覚えて、一人で読む 16
⑨ 自分なりの読み方で読む 16
⑩ 比較しながら読む 17

2.1.3 その他 18

① ものとしての本（紙）とのであい 18
② お話を取り込んだごっこ遊びをする 18
③ お話の言葉を日常会話に応用する 19
④ 本の知識を日常生活に応用する・日常生活で体験する 20
⑤ 特別な本を持つ 20
⑥ 本（電子書籍）とのであい 21

2.2. 小学校低学年編 22

2.2.1 どのように選ぶか 22

① 表紙で選ぶ 22
② 本の形（サイズ）で選ぶ 22
③ めくって中の情報を得て選ぶ 22
④ 知っているものを選ぶ 22
⑤ 好きな本を選ぶ 23
⑥ 自分なりの手掛かりで本を探す 23
⑦ 他のメディアを入り口に本を選ぶ 24

2.2.2 どのように読むか 24

① 繰り返し読む 24
② 本に書かれたことが本当かと思う 24
③ 想像力を働かせながら読む 25
④ 集中して本の世界を共有し、楽しむ 25
⑤ 子どもどうしのコミュニケーションのなかで読む 25
⑥ 読んでもらって楽しむ 26
⑦ 自発的な読みへの移行 26
⑧ 読み聞かせを通した「読書」の成長 26
⑨ 「自分の本」として楽しむ 27

2.2.3 その他 27

① お話を取り込んだごっこ遊びをする 27
② 読書の記憶が五感（匂い）と結びつく 27
③ 読んだ本や体験を伝えたい、共有したい 27
④ 大人の手助け・働きかけ 28
⑤ 読み聞かせの中に愛情を求める 28
⑥ 褒められたくて読む 29

2.3. 小学校中・高学年編 30

2.3.1 どのように選ぶか 30

① 表紙で選ぶ 30
② 知っているものを選ぶ 30
③ 好きな本（読みたい本）を選ぶ 30
④ 自分なりの手掛かりで本を探す 31
⑤ 薦められた本を選ぶ 31
⑥ 調べるため（課題を解決するため）の本を選ぶ 33

⑦　家庭にある本から選ぶ 34
⑧　他のメディアを入り口に本を選ぶ 34
⑨　無料の Web 漫画と図書館 34

2.3.2 どのように読むか 35

①　繰り返し読む 35
②　自分が読みやすい媒体で読む（紙媒体と電子媒体） 35

2.3.3 その他 36

①　コミュニケーション（伝えたい） 36

2.4. 中学・高校生編 37

2.4.1 どのように選ぶか 37

①　視覚で選び、試し読みをする 37
②　手軽に入手できる情報から自分で選ぶ 37
③　無料あるいは安価で手軽に入手できるものを読む 37
④　他のメディア（Web/SNS/動画サイト/アニメ等）を入り口に本を選ぶ 38
⑤　自分の年齢がタイトルになっている本を選ぶ 38
⑥　好きな本を選ぶ 39
⑦　学校司書に推薦された本を選ぶ 39
⑧　家族の本を読む/家族で本を薦めあう 39

2.4.2 どのように読むか 39

①　多読でスピードが早い 39
②　隙間時間に読む 40

2.4.3 その他 40

①　現物で可視化することで読書量を確認する 40
②　本の感想を伝える、共有する 40
③　読みたい本は、すぐに手にしたい 40
④　読書の好みが確立している 41
⑤　本の出来事を現実の世界で再現する 41
⑥　電子書籍で読んでも紙の本で読みたい 41
⑦　物理的な条件で電子書籍を選ぶ 41

3. アンケートの回答事例から紙の本と電子書籍を考える 43

3.1 紙の本の特徴 43

3.2 電子書籍（YouTube などのデジタルメディア含む）の特徴..... 48

3.3 まとめると..... 50

1. アンケート「子どもはどのように本などを選び、読んでいるのか」について

児童図書館研究会は 2021 年 9 月、子どもと電子メディアを考えるプロジェクトチーム（以下、PT）を立ち上げました。新型コロナウイルス禍のなか、国による臨時交付金（新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金制度）を活用し、電子書籍を導入する公共図書館が増えてきた頃でした。学校でも GIGA スクール構想により 1 人 1 台端末というハードの整備が現実のものとなる時期でもありました。また、一部の学校では電子書籍を導入する事例もみられるようになりました。

そういう状況下、私たちは電子書籍をどのように捉えればよいのか、紙の本や電子書籍が子どもの読書にどのような影響をもたらすのか、を考えるために、子どもはどのように本を選び、読んでいるのかを理解し、整理する必要があると考えました。そしてアンケート調査を実施しました。多くの回答をお寄せ頂いたことに感謝いたします。

アンケート結果からは、それらの疑問に対して直接的な答えとなるものではありませんが、私たちは、活き活きとした子どもたちと絵本や本、電子書籍とのであいの様子をみることができました。また、子どもにとって何が大切なのかも垣間見ることができ、多くのことが得られたと考えています。

1.1 調査の概要

1）調査目的

電子メディアを含めて、子どもがどのように絵本や本を選び読んでいるのかの事例を集め、整理し、分析することで、子どもにとっての読書の意味を考えるとともに、公共図書館や学校図書館が子どもに絵本や本、電子書籍をどのように提供していくのかを考える基礎資料としてまとめること。

2）調査方法

・周知：児童図書館研究会機関誌：「アンケートのお願い～子どもと読書「こんな発見」「こんな経験」「図書館・あるある」募集」『こどもの図書館』（2022 年 1 月号）および同会のホームページ

・アンケート回答方法：児童図書館研究会のホームページに設定した Google フォーム および、機関誌に折り込みのアンケート用紙でファクシミリまたは郵送

3）回答期間

2022 年 1 月 10 日（月）～2 月 28 日（月）

4）回答者

子どもの読書に関わる人や関心のある人（会員）

5）回答数

145 件

1.2 回答の内訳

1）子どもが接していた媒体は

電子書籍に関する回答は少数だった。

①紙の絵本や本	136
②電子書籍	9
合計	145

2）いつごろ

いつ頃の事例か。

「⑥2020 年以降」は、2020 年、2021 年と 2022 年 2 月までの 2 年 2 か月間となる。2010 年代が 56 件と最も多く、2020 年以降が 41 件で全体の約 1/3 を占めた。

①1979 年以前	4
②1980 年代	8
③1990 年代	13
④2000 年代	16
⑤2010 年代	56
⑥2020 年以降	41
記入なし	7
合計	145

3）どこで

事例に出会った場所がどこか。

「家庭」が 61 件と一番多く、「公共図書館」「学校図書館」が続いている。「その他」は幼稚園、保育園、教室、特別支援教室などである。「ボランティアの場」が 1 件なのは、これ以外の事例では、ボランティアの活動場所を学校や児童館等具体的に回答されていたからである。

①公共図書館	37
②子ども文庫	12
③ボランティアの場	1
④学校図書館	24
⑤家庭	61
⑥その他	8
⑦特になし、記入なし	2
合計	145

4）だれが（年齢）

「乳幼児（就学前）」が 63 件と多く、学齢が上がるごとに回答が少なくなる傾向になる。

①乳幼児（就学前）	63
②小学校低学年	32
③小学校中学年	20
④小学校高学年	9
⑤中学生	12
⑥高校生	5
記入なし	4
合計	145

5）だれが（性別）

女の子が 65%、男の子が 35%で、女の子の事例の方が多い。

①男の子	46
②女の子	86
③覚えていない、記入なし	13
合計	145

1.3 アンケート調査のまとめ

アンケート「子どもはどのように本などを選び、読んでいるのか」では、145 件の回答をお寄せいただいた。それらをプロジェクトメンバーで検討・整理して、本調査の分析対象とする 136 件の事例を抽出した。

事例は、「乳幼児」「小学校低学年」「小学校中・高学年」「中学・高校生」の 4 つの年齢層に分け、1.「どのように選ぶか」、2.「どのように読むか」、3.「その他」の 3 つの観点から、検討した。なお、一つの事例を 3 つの観

点それぞれから分析することもあったため、同じ事例が複数個所で取り上げられている場合がある。

対象となった回答の全文を個人名や団体名を削除したうえで、資料として児童図書館研究会ホームページに掲載した。なお、こちらの「まとめ」では、文脈にあわせて適宜、文章の省略や書き換えを行った。

2. 年代別に見た調査の結果

2.1 乳幼児編

＊乳幼児の読書について 63 件の事例があった。なお 1 名から、特定の子どもの家庭での読書の事例を 33 件提供していただいた。その事例については（ ）内に月齢を記載した。

2.1.1 どのように選ぶか

① 表紙で選ぶ

【事例 1】絵本を読んであげるよと 3 歳の孫にいうと 5～6 冊もってきた。どれから読むかと聞くと、絵本を床に広げて、読む順番を決めていた。（家庭・2020 年以降）

【事例 2】「14 ひきシリーズ」（いわむらかずお作　童心社）を借りたいというので、書架にあるシリーズを並べる。お母さんが『14 ひきのさむいふゆ』にしようかと聞くと、女の子は黙って『14 ひきのこもりうた』を指さす。（文庫・2020 年以降）

2 事例とも、一覧できる程度の冊数を子ども本人、または大人が目の前に並べて、その表紙から選んでいる。文字や知識による経験や情報が乏しい幼児は、表紙の見た目や感覚によって読む絵本を決め、それを並べたり、指さしたりする行動によって選んだ本を大人に示している。

② 知っているものを選ぶ

【事例 3】保育中に教師が、読み聞かせで読んだ絵本『がたんごとんがたんごとん』（安西水丸さく　福音館書店）、『パンダ銭湯』（tupera tupera さく　絵本館）、『いろいろバス』（tupera tupera さく　絵本館）、『おばけなんてないさ』（せなけいこ絵　槇みのり作詞　峯陽作曲　ポプラ社）ほか数冊を、家庭で買ってもらい、「先生と同じのを本屋さんで買ったよ」「同じの、持ってるー」と嬉しそうに教えてくれた。（幼稚園・2020 年以降）

【事例 4】5 歳くらいの女の子が「幼稚園にあるねん」と言って『モチモチの木』（斎藤隆介作　滝平二郎絵　岩崎書店）を持ってきた。（公共図書館・2010 年代）

【事例 5】お父さんと男の子が「ケーキがころがる話」の本を探してほしいというので、『愛蔵版お話のろうそく　ホットケーキ』（東京子ども図書館）を手渡す。男の子は、その表紙を見て満面の笑顔で、大きくうなずき「これ！」という。4 日後、別のお父さんと男の子がこれとほとんど同じことを聞いてきた。その後、数日前にお話の語り手の方が、保育所の年長さんに語りを行っていたことがわかった。（公共図書館・2020 年以降）

それぞれ、先生に読んでもらった本、幼稚園にある本、ストーリーテリングで聞いたお話である。読んでもらった本や聞いたお話が面白かった、その体験が良いものだったからこそ、たくさんの本からその本を探し出して、選んだのであろう。特に事例 5 は、お話そのものを楽しんで、それを追体験したいという強い思いを感じる。

③ 好きな本を選ぶ

【事例 6】息子が 0 歳のころから絵本を楽しんでいた。はじめは私がいいなと思う絵本を選んでいたが、繰り返し読んでいるうちに次第に息子の好きな本というのができてきて、「これ読んで！」と自分

から絵本を本棚から取ってくるようになった。最初にお気に入りになった絵本は『もこもこもこ』（谷川俊太郎ぶん　元永定正え　文研出版）で、何度も読むうちに絵本を自分で取ってきては「もこもこもこ」と絵本の言葉を自分でつぶやきながらページをめくったりするようにもなった。（家庭・年代記入なし）

【事例 7】我が家では、寝る前に毎晩 2～3 冊の絵本を読んできた。川端誠さん（絵本作家）の、講演会＆絵本ライブで長女（8 歳）と長男（4 歳）のためにサイン本を求め、それぞれにプレゼントした。長男へは『いちがんこく』（川端誠作　クレヨンハウス）。その何か月か後に母が図書館から借りてきた『たがや』（川端誠作　クレヨンハウス）を長男が見つけ「これ、おんなじ絵だ。これ読んで！」ともってきて読むと、長女（8 歳）も一緒にとても熱心に聞いていた。長男は「風来坊」シリーズ（川端誠作　BL 出版）も大好きでよく読んだ。プレゼントされたサイン本にはそれぞれ異なる絵がていねいに描かれており、自分の名前も書かれていた。川端誠さんの絵本は、その後新刊が出版されるたび購入したり、図書館で借りたりして、楽しみながらすべて読んだ。（家庭・2000 年代）

【事例 8】カウンターで、母親が子どもの選んだ本をみて、「その本、家にあるじゃない」という。子どもはどうしても借りたいのか、本を胸に抱きしめ、言い返す言葉を探していた。「その本好きなんだね」と助け船をだすと、子どもはこっくりとうなずいた。母親は解せない様子だったが、諦めてその本も一緒に借りて帰った。（公共図書館・1990 年代）

【事例 9】絵本を読んでもらおうと順番を待っている 5 歳の男の子。さっき読んでもらったばかりの『三びきのやぎのがらがらどん』（マーシャ・ブラウンえ　せたていじやく　福音館書店）を膝に置き、別の絵本を抱えているお姉ちゃんのあとにすり寄るように座って、「もういっかいこれよんでほしいなあ、なあ、おねえちゃん」。（公共図書館・1980 年代）

家庭での読書では、そこにある本を読んでもらっているうちに、好きな本ができて、自分から選ぶようになる。事例 6 は、好きな本ができてくる成長ぶりを報告している。

事例 7 は、サイン本をきっかけに、川端誠の絵本が好きになり、特徴のある絵から自分の好きな作家の本であることに気づき、家族で楽しんでいく様子が描かれている。親は「個別な絵と自分の名前を書いてもらったサイン本が幼い心にもうれしくて、心に届くものがあったのだと思う」と述べている。

好きな本を選ぶのは当然であるが、幼児の場合、その気持ちの表現行動が大人の理解を越えることがある。事例 8 はどこの図書館でも見られる光景だが、大人には無駄に思えても、本人にとっては借りることが、その本への自分の気持ちを表し、安心感につながるのではないだろうか。

事例 9 は、親に読んでもらおうと姉弟で順番を待っているようだが、弟はさっき読んでもらったばかりの絵本をまたすぐ読んでもらいたい、それを姉にも共感してもらおうという姉弟関係も窺える。

以下の事例は、「好きな」本とのであい方やつき合い方の多様性を示している。

【事例 10】写真絵本に興味を抱き、小寺卓矢の『いろいろはっぱ』（小寺卓矢写真・文　アリス館）と『森のいのち』（同前）を開いてしきりに眺めていた。赤ちゃん絵本や物語絵本も用意したが、それよりも自然の色に興味が湧いた様子。毎晩、就寝前に読み聞かせをしてもらっている。（家庭・2020 年以降）

【事例 11】3 歳になった頃、夕方、外へ行く行かないで揉めたとき、気分転換に「本読もうか」というと、「オニサン」と言って本箱から『しょうとのおにたいじ』（稲田和子文　川端健生え　福音館書

店）を持ってきた。言葉は少しむずかしいので簡略して語る。満足して終わりまでしっかり聞いている。（家庭・2000 年代）
【事例 12】3 歳の男の子。「汽車のえほん」（ウィルバート・オードリー文　ラジナルド・ダルビー絵　ポプラ社）シリーズを読んでもらおうと何冊も抱えて、テーブルの上に並べ、そのうちの 1 冊を選ぶ。読み聞かせを始めると、一生懸命聞いているが、途中わからない様子もあり、質問に答えたりしながら 1 話を読み終わる。すると「次にこれ読んで、次にこれ読んで、次にこれ読んで……」と順番を決めながら、テーブルの上の本を並べ替える。1 話読み終えるたびに、「次にこれ読んで」を繰り返す。（文庫・2010 年代）
【事例 13】（2 歳 0 か月）『おひさまがいっぱい』（よだじゅんいち詩　ほりうちせいいち画　童心社）最近はずっと、この本でねんね。心地よいのか、すぐにうとうととなる。「ねずみさん、なんしたはる？」「ニャンニャン、なんしたはる？」と「なんしたはる？」ばっかり言っている。（家庭・2010 年代）

事例 10 は、幼いうちから好みがしっかりとあることを示している。
事例 11 では、報告者は「絵が好きなのかもしれない」と述べており、子どもは、日本画の力強い絵に心を惹かれたとも思われる。具体的な事例はここにはないが、好きな画家の絵本や同じシリーズを次々と選んでいく子どもは多い。
事例 12 はシリーズが好きでたまらず、その気持ちを量で表そうとしている。「次にこれ読んで」は、この読み聞かせの楽しい時間がずっと続いてほしいという願いにも感じられる。
最後の事例は、寝る前に、読む本や読み方が決まっていて一種の子守唄のような働きをしている。

④　自分なりの手掛かりで記憶の本を探す

【事例 14】（11 カ月）『もうねんね』（松谷みよ子ぶん　瀬川康男え　童心社）の絵本の文句を「ねむたいよう、おやすみなさい、わん」と絵本は持たずに言い始めると、嬉しそうに笑って、いつもその絵本が置いてある所へ取りに行った。いつも全然聞いていないようだったので興味がないのかと思っていたが、私たちが思う楽しみ方とは違う方法で楽しんでいたのだと発見できた経験だった。（家庭・2010 年代）
【事例 15】友だちが読んでいた本を自分も読みたいけれど題名が分からない。本を見たら分かるので本の大きさや友だちが「この辺にあった」ということばを手がかりに本棚を探している。大人が「どんな本をさがしているの？」とキーワードを聞き出して一緒に探し出すこともある。探している本が見つからないと他の本では気が済まない子、探している途中に出会った本に目移りしてしまう子、探している子に、「その本をかりたら次ぼくがかりる」と予約する子、さまざまであるが、幼児くらいでは、本を探す、本をいじる、手に取ることを面倒がる様子はあまり見ない（小学生になると、ざっと見渡して「読みたい本がない！」と言って出ていってしまうこともある）。（文庫・2010 年代）
【事例 16】図書館職員が、返却された絵本を本棚に戻していると、しばらくついてきたり、じっと見たりした後、棚に戻したばかりの絵本をぱっと取って、それを持っていく。それ自体に興味があったのか、職員が戻しているものに興味があるのかは不明。職員に触ってきたり、「それ借りる」と言ってきたりすることもある。たいがい、子ども単独で職員とやりとりすることが多い。（公共図書館・2020 年以降）
【事例 17】5 歳になる少し前のこと。なんか真剣に考えていて。「『ておんをさがせ』イウホン、アッ

タセロ。アンコクセイウン、ギルゴル、ウズマキ…。ナンデヤロ？」　その本はもう手元になく、私（祖母）は下手に自分の考えを言ってしまって、何をどう思い出したのか訊けなかった。その本を読んでやったのは、一年くらい前のことだった。（家庭・2000 年代）

事例 14 では、11 カ月の乳児が、絵本の言葉だけで、物としての特定の本を認識し、探しに行っている。報告者は、それまで子どもが全然聞いていないように思えていても、意外に聞いていたことを発見しているが、このようなことはよくある。幼い子どもは、そっぽを向いたり、歩き回ったりしていても耳はしっかりと言葉をとらえているものだ。

事例 15 は、本の大きさや書架の位置の記憶から探そうとしている。物としての側面を最も重要な手掛かりにしている。また幼児が、本を探す、いじる、手に取ることを面倒くさがらずに、自然に行っている様子を報告している。

事例 16 は、「それ自体に興味があったのか、職員が戻しているものに興味があるのかは不明」とあるが、書架に並んだ本よりも、人が触ったばかりの本に親しみを感じ、選ぶ手掛かりを求めているのかもしれない。「子ども単独で職員とやりとりすることが多い」という報告も興味深い。頼れる大人がそばにいないが、自分の意志で本を探そうという意欲が感じられる。図書館に初めて来た幼児に、好きな絵本を見てねと言ってもなかなか手を出すことができず、職員が、1 冊の本を出して見せると、それを素直に手に取ることがよくある。整然と並んだ本からは選べず、大人が手渡してくれることによって初めて本とであえるのかもしれない。大人の介在が選ぶことを助けているといえる。

事例 17 は、1 年前に読んだ本の記憶を祖母に伝えようとしている。大人には意味が分からなくても、子どもの中にはその本の記憶がありありと残っている様子が窺える。

2.1.2 どのように読むか

① 五感で楽しむ

【事例 18】（1 歳 1 ヶ月 24 日）『がたんごとんがたんごとん』本を開いて、読んでもらう時にいつもするように、がたんごとーんがたんごとーんと体をゆらす。本物の電車が通るときも体をゆらす。（家庭・2010 年代）

【事例 19】（1 歳 2 ヶ月 19 日）『ぶーぶーぶー』（こかぜさちぶん　わきさかかつじえ　福音館書店）「きいろいじどうしゃ ぱっぱっぱっ」と読むと「ぱっぱ」と真似をした。「のりますのります カタコトカタコト」でリズムにのって体を揺する。（家庭・2010 年代）

【事例 20】（1 歳 1 ヶ月 9 日）『ごぶごぶごぼごぼ』（駒形克己作　福音館書店）穴に指をかけてページをめくっていくのが好き。「さわさわ」のページにはいろんな丸をこすって穴を探す。（家庭・2010 年代）

子どもは、擬音や擬態語、リズミカルな言葉が好きだが、幼い子ほど言葉のリズムに合わせて、思わず体を動かしたり、繰り返して唱えたりする。事例 18 では、本物の電車とであったときにも、本を読んでもらうときと同じ行動をとっている。また、事例 20 では穴に指を入れたり、ページの絵をこすったり、物としての本を五感を通して楽しんでいる。

② 本を通してのコミュニケーションを楽しむ

【事例 3】 保育中に読み聞かせた絵本の数冊を家庭で買ってもらい、「先生と同じのを本屋さんで買っ

たよ」「同じの、持ってるー」と嬉しそうに教えてくれた。（幼稚園・2020 年以降）
【事例 4】カウンターで、5 歳くらいの女の子が『モチモチの木』を持ってきて、「おじいちゃんがおなかいたくなって、おいしゃさんにつれていくねん」「この木がぴかぴかするねん。ここ読んで」といろいろ話しかけてきた。（公共図書館・2010 年代）
【事例 21】平日の午前、図書館の赤ちゃんコーナーで、おばあちゃんが 2 歳ぐらいの女の子に絵本の読み聞かせをしていた。「今度、何読もうか、これどうかな」との会話がとても微笑ましく、ちょうど、朝の日差しが二人を照らしていた。まだ、開館したばかりで静かな図書館の空間で 2 人は時間を大切に楽しんでいるようだった。（公共図書館・1990 年代）
【事例 22】おかあさんと男の子、その遊び友だちらしい男の子たち 3 人、おかあさんに『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』（バージニア・リー・バートン文・絵　むらおかはなこ訳　福音館書店）を読んでもらっている。3 人はだまって絵をじっとみて聴いている。ちゅうちゅうが跳ね橋を飛び越える場面で一人がつぶやく、「落ちんねんで」。ほかの子が、「そうや」。ページがめくられる。3 人はひたすら聴きつづける。（公共図書館・1980 年代）
【事例 23】5 歳男児。ほかの利用者に自分の好きな本をもってきて、お勧めする。『せんたくかあちゃん』（さとうわきこさく　福音館書店）を手にしている同じくらいの女の子に、『くもりのちはれせんたくかあちゃん』（同前）を渡したり、特別支援学級の先生に『サンドイッチ　サンドイッチ』（小西英子さく　福音館書店）を渡したり、それなりに的確（文庫・2020 年以降）
【事例 24】娘が二人目を出産し、実家に帰ってきた。5 歳のお兄ちゃんは、はじめはどう対応してよいかわかりかねていたが、突然本棚から『だるまさんが』（かがくいひろしさく　ブロンズ新社）を取り出し、自分もあお向けになって赤ん坊に読み聞かせを始めた。（家庭・2010 年代）

年齢や相手によって、本を介在させて、会話を楽しんだり、おしゃべりしたり、気持ちを交わしたり、様々なコミュニケーションがとられていることが報告されている。

事例 3 では幼稚園や保育園などの集団での読み聞かせとその後の子どもの反応について「子どもには（集団での読み聞かせが）特別楽しい時間。楽しい時間、楽しい絵本の体験、思い出を家庭に持ち帰り、共有できることは、大変嬉しい」と報告者は説明している。

事例 4 では、カウンターの職員に話したくなるほど、その絵本が好きであり、また職員を自分の話を聞いてくれる人として信頼している。

事例 21 では、孫と祖母が絵本を間に楽しそうにくつろいでいる様子が伝わる。「開館したばかりで静かな図書館の空間」というのもその喜びを深めているように見える。「どこで」、と言うのも一つのポイントかもしれない。

事例 22 では、本を通して楽しむコミュニケーションが、さらに深まっている。一緒に物語を共有しながら、知っている内容への期待を口にすると、友だちもそれに応じる。それでも子どもたちは本の世界へとそれぞれ没頭し続けている。

事例 23 は、自分の好きな本を他の利用者に薦めている。文庫で他の大人がやっていることの模倣でもあるが、本を介在させて、他人とコミュニケーションをとっているといえる。

事例 24 では、「お兄ちゃんとしては赤ん坊とのコミュニケーションの方法として絵本の読み聞かせをしたのだと思う」と報告者は書いている。弟を歓迎する気持ちを好きな絵本を読むことで表したのだろう。赤ん坊が絵を見られるようにあお向けになるなど、自分がいつも両親にやってもらって楽しんでいることを模倣している。

③ 繰り返し読む

【事例 25】家と保育所で絵本を親しんでおり、『もこもこもこ』が大好きで、くり返しくり返し読んでいた。（家庭・2000 年代）

【事例 26】図書館に来ていたお母さんたちの間で、せなけいこの『ねないこだれだ』（せなけいこさく・え　福音館書店）について、子どもが「すごく好き。何回も借りている。もう全部覚えて自分で読んでいる」「『ねないこだれだ』を読み始めるとパッと起きる」と、ひとしきり話題になっていた。（家庭・2000 年代）

繰り返し読むことは幼児の読み方の基本的な特性である。

ここでは 2 つの事例しかないが、事例 25 と事例 26 では、乳幼児期の子どもたちに圧倒的に支持される絵本として『もこもこもこ』と『ねないこだれだ』が挙げられている。繰り返し読んでもらった結果、言葉を覚えてしまうことも報告されている。

④ 絵を読み取ろうとする

【事例 27】（2 歳 0 ヶ月 6 日）『ぼくしんかんせんにのったんだ』（わたなべしげおさく　おおともやすおえ　あかね書房）の細かいところまでよく見て「ライオンさん、なにしたはんの？」「うさぎさん、なにしたはんの？」「これは？」と質問攻めで、なかなかすんなりと読めない。（家庭・2010 年代）

常に子どもは絵本の絵を読み取ろうとしている。時にはストーリーと関係のないところにも興味を持つので、事例 27 のように質問攻めになってしまうこともある。

⑤ 本の登場人物の行為を思わず実際にやってみる（読み聞かせ中）

【事例 28】おはなしの時間に『シナの五にんきょうだい』（クレール・H・ビショップぶん　クルト・ビーゼえ　いしいももこやく　福音館書店）を読んだ。すぐ前に座った男の子、いちばん上のおにいさんが海の水を飲み干して顔がまんまるになる場面で、自分では気づかずに頬をぷうっとふくらませて聞いていた。（公共図書館・1979 年以前）

絵本の読み聞かせやストーリーテリングを聞きながら、子どもが自然に登場人物の真似をするのをよく見かける。それだけお話に集中して、思わずやってしまい、そういう行動をしていたことさえ子どもは意識していないのではないだろうか。あるいは、お話を確認するという意味もあるのかもしれない。

⑥ 本の言葉に反応して模倣（まね）する・内容にふさわしい行動をとる

【事例 29】（1 歳 1 ヶ月 25 日）『おにぎり』（平山英三ぶん　平山和子え　福音館書店）。自分で取る真似はしないが、こちらが取る真似をして口に差し出すと食べようとする。（家庭・2010 年代）

【事例 30】（1 歳 2 ヶ月 1 日）『ねないこだれだ』ネコを指差して触る。本物のネコに触るように、ちょんと触ってすぐ手を引っ込めてニヤっと笑う。実物のネコを触る時と同じやり方だった。（家庭・2010 年代）

【事例 31】（1 歳 3 ヶ月 14 日）『おつきさまこんばんは』（林明子さく　福音館書店）これも最近よく

持ってくる。「おつきさまこんばんは」とタイトル を読むと、まずペコペコとおじぎ。そしてネコを触り、「あ、おつきさまだ」で「うわ！」と声をあげ、「おつきさまこんばんは」で、またペコペコおじぎ。「おつきさまがないちゃう」で「あー（あーんあーんのつもり）」。「ではさようなら」で手をひらひらさせてバイバイ。「まんまるおつきさま こんばんは」で、またペコペコおじぎ。と合いの手をいれてくれる。（家庭・2010 年代）

【事例 32】（1 歳 5 ヶ月 28 日）『バナナです』（川端誠作　文化出版局）ひたすら絵のバナナを食べる真似をして遊ぶ。最初は絵を指差して、口をもぐもぐして、私に食べさせろと言うので、バナナを取って食べさせる真似をする。それから自分でもバナナを上手につまんで、口をもぐもぐさせて「しいー」（おいしい）と言う。「お母ちゃんにもちょうだい」と言うと、私にも食べさせてくれるし、「くーまちゃんも欲しいって」と言うと、くまのぬいぐるみにも食べさせる。（家庭・2010 年代）

【事例 33】（1 歳 6 ヶ月 22 日）『バナナです』前からバナナの絵を取って動物たちに食べさせる真似をするのだが、最近は食べさせる時に「まんまんま」と言って、食べる感じを出している。自分が食べる真似をする時も同じ。そして「あいしー」（ああ、おいしい）と言う。（家庭・2010 年代）

【事例 34】（1 歳 7 ヶ月 17 日）『おやすみなさいコッコさん』（片山健さく・え　福音館書店）ねんねの時、急に「コッコさん！コッコさん！」と言い出したので読んでやる。「コッコはねむらないもん」の後「もん！」とまねする。コッコさんがくまちゃんと一緒に寝ている場面を見て「おーとん！（お布団）」「まーま！（くま）」と言って自分もお布団をかぶってくまさんと一緒に寝ていたが、自分のくまさんにはぼうし（スカーフ）がかぶせてあって、そこが絵本と違うのが気に入らなかったらしく、「ぼーし！ぼーし！」と訴える。スカーフをとってやると満足した様子。

『おにぎり』を友だちと遊んでいるときに読んでやった。のりを巻いたおにぎりいっぱいのページで「わあ！」とお友だち。私がおにぎりをとるまねをして自分の子にあげると、「まんまんま、あいし！（ああおいし）」とやる。「お友だちにもあげて」と言うと、とるまねをして差し出し、友だちも子どもの手から「まんまんまー」と食べる。（家庭・2010 年代）

一人の子どもの記録だが、1 歳 1 カ月では食べる真似や食べさせる真似だったのが、ストーリーの展開に従って、お辞儀をしたり、泣いたり、バイバイしたり、絵本との関わり方（読み方）が発展している。1 歳 7 ヶ月では、行動の真似だけでなく「あいしー」や「おーとん」「まーま」など子どもの口から言葉が出始めている。

事例 34 の『おやすみなさいコッコさん』で、「もん！」と文末の言葉をまねるのは、絵本の言葉を覚える第一歩と言える。話し言葉では、最後の言葉が耳に残ることはあまりないが、読み聞かせでは、文末の言葉が子どもの耳に残るようである。また、くまさんの帽子を取ってほしいという訴えは、現実の世界で、絵本を再現しようとしている。ごっこ遊びの萌芽といえよう。

『おにぎり』では、食べる真似が、友だちとのごっこ遊びに発展している。この事例では、『おにぎり』を読んだことがきっかけであるが、今後、成長に従って、絵本がそこになくても、遊びの中に、絵本の言葉や行動が現れてくることにつながる。

⑦ 本との対話

【事例 35】（1 歳 5 ヶ月 30 日）『あそぼうよ』（レオ・レオニ作　谷川俊太郎訳　好学社）最後のお月さまのページがなぜか大好きで、「あったー！」ときゃっきゃ言う。最初のページの「おはよう」で頭をぺこりと下げる。自分でめくりやすいからか、一人でめくりたがる。一人で見ていて、「ないねー」

「ないねー」「ないねー」とページをめくっていって、最後のお月さまのページで「あ！あったあった！」と言うのを繰り返す。絵本の中の食べ物を食べる真似をしたりするのは、私が仕掛けたことだけれど、この遊びは自分で考案したので驚いた。言葉が話しかける調子だからか、読むと相づちをうつ。「ほんをよんでもいいし」「あい」（はい）、「おはなをつんでもいいし」「あい」、「〇〇してもいい」「うん」という感じ。レオ・レオニは好きだけれど、お花をつんだりは、まだしたことないし、かくれんぼなんかも、ネズミがやっているのでわかりにくいかなと思ったが、本人はいくつかの好きなページがあれば他は気にしないという感じで気に入った様子。（家庭・2010 年代）

【事例 36】（2 歳 0 ヶ月 8 日）『おおきなかぶ』（A.トルストイ再話　内田莉莎子訳　佐藤忠良画　福音館書店）「ひっぱったはる」といちいち言って喜ぶ。ネコが出てくるところまでくると、「ねずみ、きゃーるかな（来はるかな）？こんど」と言い、ねずみが出てくると「きゃーった（来やはった）！きゃーった！」「おもしろいなあ」と言う。（家庭・2010 年代）

【事例 37】（2 歳 0 ヶ月 22 日）『またもりへ』（マリー・ホール・エッツぶん・え　まさきるりこやく福音館書店）「ぞうさん、なんしたはる？」「くまさん、なんしたはる？」と、これも「なんしたはる？」を連発する。今日はこの絵本がいいみたいで、父にも何回も読んでもらっていた。うさぎが出てくるページで、「（うさぎが）〇〇ちゃん、（自分の名）みたはるー！」と言う。そして「〇〇ちゃんもみるわな！」と言って絵本を覗き込んで喜ぶ。（家庭・2010 年代）

【事例 38】（2 歳 2 ヶ月 10 日）『ぼくしんかんせんにのったんだ』　初めからしまいまで、口を挟んで挟んで、なかなかすんなり読ませてくれない。「うさぎさん、しんかんせん待ったはんねん」「小さいカメさん、おかーさん！って言うたはんねん」「あ、牛さんがいるよ！」「それ、いのししや」と私。「いのししさんか、めがねかけたはるよ」そして、もう話を覚えているので一緒に「ねえ、パパ」というセリフを言って、「一緒に言うたわ」と言ってみたり。「くまさん、おいしそうやなーって見たはんねん」と、私が読んでいるのを遮って喋っておいて、いきなり「読んでよ！」と言ったり、読んでいる途中に「お母ちゃん、何してんの？」と聞いたりする。「読んでんにゃん！！」と答える。（家庭・2010 年代）

本を読みながら、読み手と会話したり、一人で話したりすることを「本と対話する」ととらえてみた。

事例 35 では、自分で考えた遊びを繰り返し楽しんでいる。最後の場面に出てくるお月さまを期待して、「ないねー」「ないねー」と言っているが、その頃読んだ『おつきさまこんばんは』も影響を与えているのかもしれない。『あそぼうよ』がボードブックでめくりやすいことや大きさも遊びを誘う一因だろう。呼びかける調子の文章を察知して、相槌を打っているのも的確な判断で感心する。

事例 36 では、良く知っているストーリーなので、先を予想して、その通りになることを喜んでいる。毎回読むごとに「おもしろいなあ」と繰り返しを堪能している様子がわかる。

事例 37 の「（うさぎが）〇〇ちゃん、みたはるー！」と言う。そして「〇〇ちゃんもみるわな！」と言って絵本を覗き込んで喜ぶ。」が興味深い。絵本の絵は、じっと動かない無生物ではなく、子どもにとっては、生きて動いているものである。うさぎが自分を見ていると信じて、今度は自分もうさぎを見ようと言って、絵本の世界に参加している。

事例 38 では、繰り返し読んだ絵本の絵をさらに見ては、気づいたことをおしゃべりしたり、読み手と一緒に唱えたり、心ゆくまで楽しんでいる。

⑧ 読み聞かせから絵本の言葉を覚えて、一人で読む

【事例 39】（1 歳 8 ヶ月 17 日）『ルルちゃんのくつした』（せなけいこさく・え　福音館書店）一人で読んでいた。靴下がなくなって困り顔のルルちゃん―「ちゅちゅった（靴下）ないねー」 靴下をぬいでポイっとしている―「ポイ！あーあ」 先生にきく―「せんせ、しんなーい（知らない）」 ゾウさんがマスクにしている―「ゾウさん、マスクーマスクー」 泣いている靴下―「あーんあーん、いたいいたい」 ごめんなさいねくつしたさん―「ごめんね、ちゅちゅった」 何度か読んだだけでこんなに覚えていてびっくりした。「せんせい」なんてなじみがない存在だし、マスクもほとんど知らないはずなのに。（家庭・2010 年代）

【事例 40】（2 歳 1 ヶ月 27 日）『ぼくパトカーにのったんだ』（わたなべしげおさく　おおともやすおえ　あかね書房）昼に 2 回読んだら、夕方もう覚えて自分でところどころ読む。「ブーブーとせんたくやさんがやってきました。」「チリンチリンとベルをならして。」「ぼうや、あぶないぞ！」くまたくんのお母さんがくまたくんを探して「じてんしゃもないし…くまたー！くまたー！」と呼ぶところなんかは、真に迫っていて、とても上手。（家庭・2010 年代）

数回読み聞かせただけで、言葉を覚えてしまう能力に驚く。事例 39 では、本人の知らない「マスク」や「先生」も受け入れて、覚えてしまう。幼児の時代は知らない言葉ばかりだから、知らないことが読むこと、楽しむことの障壁にならず、他に面白いことがあれば、知らない言葉も受け入れてしまう。読んでもらった通りに読むので、棒読みではなく、事例 40 のように真に迫って読むことができる。読むというより、お話するという気持ちかもしれない。

⑨ 自分なりの読み方で読む

【事例 34】（1 歳 7 ヶ月 17 日）『どうぶつのこどもたち』（小森厚文　薮内正幸絵　福音館書店）自分で絵本を見つけてきて、一人で「ウワンウワン」（ワンワン）、「パウパウー（パオパオー）、ゾウさん」、「きいん」（きりん）、「パッカカー」（馬の足音）、「アイアイ」、「ニャンニャン」などと言いながらパラパラ上手にめくって見ていた。（家庭・2010 年代）

【事例 41】図書館の児童コーナーで一人音読中の女の子。耳で覚えたおはなしを声に出しているのかと思ったら、『桃源郷ものがたり』（松居直文　蔡皋絵　福音館書店）の絵を見ながら、自分で作ったおはなしを“朗読“していた。「すると、お花がさいていました」等、接続詞を使って、いかにも文章を読んでいる風な様子に、普段からよく本を読んでもらっているんだろうなと想像した。（公共図書館・2010 年代）

【事例 42】字が読めない男の子が家にあった『ろくべえまってろよ』（灰谷健次郎作　長新太絵　文研出版）を初めて手に取った。ページをめくってしばらくながめてから、夕食を作る母のそばのテーブルに持ってきて絵を見ながら語り始めた。「こどもたちはがんばれといいました」「いぬはしょんぼりねてしまいました」と、 絵に描かれた表情や動きを捉えて結びつけながら物語の進展を想像して、お話にして聞かせてくれた。「しょんぼり」は『ぐるんぱのようちえん』（西内ミナミさく　堀内誠一え　福音館書店）から仕入れた言葉だったと思う。（家庭・1990 年代）

【事例 43】（1 歳 3 ヶ月 8 日）何か普段聞いたことのない調子で喋っているなと思ったら、『はらぺこあおむし』（エリック・カールさく　もりひさしやく　偕成社）を自分で持ってきて、開いて見ていた。読んでいるつもりみたい。（家庭・2010 年代）

【事例 44】（1 歳 11 ヶ月 6 日） 家事の間、放っておくと、機嫌がいい時は一人で次から次へと絵本を

引っ張り出して、ずーっとお話をしている（読んでいる）。色々喋るようになったな、とそのことばかりに目がいくが、よく考えてみると、いつのまにかちゃんと想像力が育っているということだなと気づく。（家庭・2010 年代）
【事例 45】（2 歳 8 ヶ月 11 日）「ピーターラビット」（ビアトリクス・ポター作　石井桃子訳　福音館書店）の（シリーズ）中の一冊を開いて読み出す。「うさぎのあーちゃん」これは題名らしい。一枚めくってもう一度「うさぎのあーちゃん」そして私の方を見て「これあーちゃんっていううさぎなん。」と言い「ある日、あーちゃんは…と始める。王さまなんかも出てきていた。しばらくすると同じ本の題名が「あさごはんのしたく」に変わって、また読んでいた。ちゃんと題名をつけて、それを初めに 3 回くらい読むところが面白い。（家庭・2010 年代）
【事例 46】（2 歳 8 ヶ月 14 日）『ふたりはともだち』（アーノルド・ローベル作　三木卓訳　文化出版局）を自分で読む。「おてがみ」のところを聞いていると、ちゃんとカタツムリに手紙を入れてきてくれとたのんだり、「カタツムリはまだきません」と何度も繰り返したり。思ったよりも話を理解している様子だった。こういう難しい絵本（ピーターラビットとかも）は、完全に理解できる絵本とは違う楽しみ方をしているのかなと思う。ストーリーを楽しむというよりは、読んでもらっている、その感じというか空気が好きというか。題名から始まって、"お話"を読むときの抑揚であるとか、終わる時に少しテンポが落ちて、「おしまい」と終わる感じとか。真似して一人でピーターラビットのシリーズなんかを読んでいるのを見るとそう思う。題名はちゃんと 2 回か 3 回"読んで"ところどころ覚えている言葉なんかを取り入れながら、本当に上手に強弱をつけて読み、「〇〇でした」とかなんとかで話が終わり、最後は「おーしーまい、まいまい」（まいまい、とつけるのが好き。ちゃんちゃん、みたいなものだと思う）と締める。ピーターラビットでは「にばしゃ」や「おくさん」がちゃんと出てくるのが面白い。（家庭・2010 年代）

読んでもらって覚えた本ではなく、絵本の絵を見て、ストーリーを読みとり、それを言葉にして、「自分なりの読み方」をする子どももいる。子どもの想像力と創造力の豊かさとたくましさを示している。どの事例も子どもの言葉が、口語体ではなく文語体になっていることが興味深い。読み聞かせをしてもらった経験が豊富な子どもと思われるが、その体験を通して、本の言葉は、日常語と違う改まった言葉であることをわかっていて、自分の語彙のなかからぴったりの言葉を探してきていることに驚く。

事例 42 の『ぐるんぱのようちえん』の「しょんぼり」は、「ぐるんぱはしょんぼり、しょんぼり」と何度も繰り返し出てくる印象深い言葉であるが、それを的確に使っていることも見事である。

事例 43 以下の 5 事例からは、一人の子どもが成長するにしたがって、読む絵本も読み方も変わっていく様子がわかる。報告者も書いているように、題名を 3 回読んだり、抑揚や強弱をつけて、最後の締めくくりも付ける、まさに本読みごっこのような様子である。読み聞かせが好きで、その時間が心地よく、自分もまねているのであろう。

⑩ 比較しながら読む

【事例 47】2 歳の女の子。『くだもの』（平山和子作　福音館書店）が 2 冊あることに気づき、2 冊並べて、めくりながら絵を比べて「おんなじ、おんなじ」と繰り返す。その直前に『おんなじおんなじ』（多田ヒロシ作　こぐま社）を読んだので、その言葉がぴったりで、うれしそうだった。（文庫・2020 年以降）
【事例 48】『ないしょのおともだち』（ビバリー・ドノフリオ作　バーバラ・マクリントック絵　福本

友美子訳　ほるぷ出版）が大好きな女の子が、続編の『ないしょのかくれんぼ』を見つけ、2冊の絵を並べ、同じ家の内部や家具が描かれているのを比較し、確認しながら楽しんでいる。（文庫・2020年以降）

図書館などで同じ絵本を並べて比べ読みしていることを見かけるが、同じ本であれば、内容も同じなのは当然と大人は思っているが、子どもは、1頁、1頁、興味を持って比べて、確認しているのであろう。事例47では「おんなじ」ことがうれしく、繰り返し見ているし、事例48は、同じ家を舞台にした作家が意図したような楽しみ方といえるかもしれない。

2.1.3 その他

本を選ぶ、読むに該当しない事例をここでは取り上げる。

① ものとしての本（紙）とのであい

【事例49】2歳の男の子が、福音館書店のブルーナの絵本を書架から大量に出してきて、タイルのように敷き詰めたり、積み木のように積み上げたりしていた。2つ上の姉が本を読んでもらっておもしろそうにしているのを知っているので、自分も本をさわって、関わりを持ちたかったらしい。片付けようよ、と声を掛けたら、「だめー」と本の上に覆いかぶさった。（公共図書館・2010年代）

ブルーナの絵本の形、大きさ、色ならではの“もの”として扱い方である。おもちゃのように運んだり、並べたり、積み上げたりして楽しんでいる。本という形があってこそ、また本への親しい気持ちがあってこその遊びではないだろうか。

② お話を取り込んだごっこ遊びをする

【事例38】（2歳2ヶ月10日）お風呂で手桶を使って、お湯をまいて「ね、ひとつひとつちゃんとかけてやってます」と『ちいさなうさこちゃん』（ディック・ブルーナぶん・え　いしいももこやく　福音館書店）のふわふわさんの真似を、このところ毎日やっている。最近はこの本、あまり読んでないのだけれど、"しみついている"のだなあと思う。（家庭・2010年代）

【事例50】（1歳9ヶ月1日）絵本のない時に『のせてのせて』（松谷みよ子文　東光寺啓絵　童心社）の話をする。（そうじきにのっていたので車のつもりだったのかもしれない）「みんなのった！」とか「トンネルトンネル、まっくあまっくあ」とか言いながら遊ぶ。（家庭・2010年代）

【事例51】（1歳11ヶ月6日）『わたしのワンピース』（にしまきかやこえとぶん　こぐま社）　手芸の材料（刺繍糸）の箱を開けて「わたしのヤンピース（ワンピース）をつくろーっと！」と言う。（家庭・2010年代）

【事例52】（2歳5ヶ月20日）『ピエールとライオン』（モーリス・センダックさく　じんぐうてるおやく　冨山房）「アイスコーヒーできたよって言うたら、ハーイって言うてね！」と聞こえたので「はーい」と返事をする。「わかったかしら？」と聞いてくるので、「わかりました」と答えると「ピエールみたいに言うて！」と言うので「ハイ！わかりました！」と『ピエールとライオン』の真似で答える（2歳1ヶ月21日のときにはこの絵本を何回も読み「はい、わかりました！」を二人で言い合って遊んだ）。（家庭・2010年代）

【事例53】（2歳0カ月24日）『もりのなか』（マリー・ホール・エッツぶん・え　まさきるりこやく

福音館書店）くまがピーナッツを数えるのがとても好きらしく、「おまめかぞえたはるー！」とものすごく嬉しそうに言う。絵本を読んでいない時でも「くまさん、おまめかぞえたはんねん」と言って遊んだりする。（家庭・2010 年代）

絵本で起きた事件や文章に書かれた言葉は、様々なごっこ遊びに発展する。掃除機を車に見立てたり、手芸の箱から『わたしのワンピース』が始まったり、手桶でお湯をまく行動からふわふわさんの水まきを再現したり、子どもの想像力の豊かさを表している。また母親が、「ハイ!わかりました」と的確に答えるなど、一緒に絵本を楽しんできた人が身近にいてこそ、できる遊びである。

事例 53 では、クマがピーナッツを数える場面が好きで、それが遊びに発展している。やはり自分の好きな場面が遊びに出てくるのであろう。

③ お話の言葉を日常会話に応用する

【事例 53】（2 歳 0 カ月 24 日）公園の池に大きな鯉がいて、水面にあがってきたら「ぼかって！！」と言う。「ぼか」というのは『おふろだいすき』（松岡享子作　林明子絵　福音館書店）でカメが出てくる時の音。覚えた言葉をちゃんと応用している。 ベランダに足を出して、「にわさきでみてるねん」と言う。「にわさき」なんて言葉をなんで知ってるんや？と思ったら、『つきよのばんのさよなら』（中川正文さく　太田大八絵　福音館書店）で、男の子が縁側に座って庭を見ている場面で、この言葉が出てくるのだった。縁側から足を出している感じとよく似ていたからだろう。（家庭・2010 年代）

【事例 54】（1 歳 9 ヶ月 29 日）『むかでのおつかい』（遠藤君・難波尚子文 岡田淳絵 月刊絵本フレンドシリーズ）、「むかでの医者むかえ」を絵本にしてある。むかでが「しっぱいしっぱい」と言うところを気に入っていて、真似をする。（家庭・2010 年代）

【事例 55】（1 歳 10 ヶ月 3 日）ごはんを食べている時にコップを倒して「しっぱいしっぱい」と『むかでのおつかい』の絵本の中のことばを使う。（家庭・2010 年代）

【事例 56】（1 歳 11 ヶ月 15～18 日）『ぼちぼちいこか』（マイク・セーラーぶん　ロバート・グロスマンえ　いまえよしともやく　偕成社）の文を覚えて、時々「ま、ぼちぼちいこかということやー！」と言ってくれるので、イライラがフッとほぐれて良い。こちらも読みながら「そやそや、ぼちぼちいこか」と思えるので、子育て中には、そういう意味でも良い絵本だなと思う。（家庭・2010 年代）

【事例 57】（2 歳 1 ヶ月 3 日）父に「かいだん、とぼとぼおりてきてー」と言う。「とぼとぼ」の意味はよくわかっていないみたい。これは『あくたれラルフのたんじょうび』（ジャック・ガントスぶん　ニコール・ルーベルえ　こみやゆうやく　ＰＨＰ研究所）に出てくる言葉。（家庭・2010 年代）

【事例 58】（2 歳 1 ヶ月 14 日）皆で散歩に出かけた。夫が先に行くと「ぼくたちもいきますよー」と『もりのなか』のくまのセリフを言って、私の方を見て「くまたち、やな」と嬉しそうに言う。（家庭・2010 年代）

事例 54 と 55 では、絵本で気に入った「しっぱいしっぱい」という言葉を楽しんでいるうちに、自分が失敗した食卓での場面で的確に使っている。「にわさき」のように知らない言葉も臆することなく、それと思われるときに使ってみせている。

④ 本の知識を日常生活に応用する・日常生活で体験する

【事例 46】（2 歳 8 ヶ月 14 日）『ははははのはなし』（加古里子作　福音館書店）ごはんの時にもずくを食べながら「私、ちゃんと噛んでる！」と言って「『ははははのはなし』にのってたな。」と付け加える。（ごはんの前に読んでいた。）「ああ、噛まへんかったら病気になるって書いてあったなあ」と言うと、「私、ちゃんと噛んでるから病気にならへんもーん！」と言う。（家庭・2010 年代）

【事例 59】（2 歳 1 ヶ月 21 日）『ペネロペひとりでふくをきる』（アン・グットマンぶん　ゲオルグ・ハレンスレーベンえ　ひがしかずこやく　岩崎書店）Tシャツを着る時に「うーんうーん、ってペノドペ言わはんねん。シャツ着るのむっかしー！って」と、何でもすぐ絵本に繋がるみたい。（家庭・2010 年代）

【事例 60】（2 歳 11 ヶ月 9 日）『はじめてのおつかい』（筒井頼子さく　林明子え　福音館書店）　外で走って転んで「はじめてのおつかいみたいやな！」と言う。そして「こうしゃはるやろ？」と「みいちゃん」の真似をしてケンケンする。（家庭・2010 年代）

事例 46 は、絵本から得た知識を日常生活で確認している。

事例 59 は、絵本の状況と同じになって、思わず主人公の真似をして、共感している。

事例 60 では、転んだことから『はじめてのおつかい』を思い出し、文章にはないが、みいちゃんがケンケンしている真似をしている。絵をよく見ていることに驚く。

⑤ 特別な本を持つ

【事例 61】『じゃあじゃあびりびり』（まついのりこさく　偕成社）は、私が甥の子どもが誕生した時にプレゼントした。甥の子どもは 4 才になっても、おもちゃ箱に入れて大切にしていて、私に楽しそうに読み聞かせをしてくれた。（家庭・2010 年代）

【事例 62】ある朝、保育園児の息子が朝食のテーブルでなんの前触れもなく「ぼく、八方にらみねこ！」と大声で宣言をする。一緒にいた家族は突然のことで驚く。「八方にらみねこ」という言葉がなぜ出たのか分からないまま月日が過ぎた。たまたま公共図書館で『八方にらみねこ』（武田英子文　清水耕蔵絵　講談社）を読んで、息子の行動に思い当たった。当時、自宅では猫を飼っていた。猫は食事時になると、何か食べ物が落ちてこないか息子の足元をウロウロし、少しでもこぼそうものなら、恐ろしい形相で息子を威嚇して拾い食いしていた。我が家の力関係でいうと、息子は 5 人と猫 1 匹の家族の中で、一番下であった。また、保育園の生活では、乱暴なことは嫌い、じっくり考え行動する息子は、力の強い男子に「弱い」と、こちらでも力関係では下に見られていた。息子は保育園でたまたま読んでもらった『八方にらみねこ』の話に惹かれたのだ。ある時から長髪だった髪を「男になる」と坊主にし、保育園で電車に乗って出かけるときは時刻表を調べてみんなの前で発表したり、と堂々としていった。息子は当時、多くを語らなかったが、『八方にらみねこ』の絵本に自分を重ねたことは見当がつく。息子は当時、自分が保育園で弱いと思われていることや、されて嫌だったことを、家族の前では絶対に話さなかった。思い出として話すようになったのは、小学校高学年になってからである。嫌な記憶を思い出したくない、とも言っていた。だからこそ、当時、息子の心を支えてくれた絵本だったのだろうなあ、と今も思っている。（保育園・2010 年代）

どちらの事例も自分にとって特別な本の存在が、心のどこかを満たしてきた様子が窺える。事例 61 は、本をおもちゃ箱に入れて、長い間、読んだり、触れたりして大切にしてきていたし、事例 62 は、本こそ手元に

ないが、読み聞かせてもらったときの思いがしっかりと心に根付いて、その子を支えてきたと思われる。

⑥ 本（電子書籍）とのであい

【事例 63】GIGA スクールで小学 3 年生の孫が iPad を（家に）持って帰ってきたら、3 歳の弟がいろいろ操作をして、翌日、お兄ちゃんは先生にこっぴどく叱られたそうだ。（家庭・2020 年以降）

この文章だけでは状況がつかめないが、3 歳であっても iPad に興味を持ち、操作ができる。今後同様のことが家庭や学校で起こるであろう。

2.2. 小学校低学年編

小学校低学年の読書については、30 件の事例があった。

2.2.1 どのように選ぶか

① 表紙で選ぶ

【事例 64】車が大好きな男の子。クリスマス本として飾ってあった『急行北極号』（C.V.オールズバーグ絵と文　村上春樹訳　あすなろ書房）の表紙を目に留め「カッコイイ」と喜んで借りて 2 度も借りていった。（学校図書館・2020 年以降）

【事例 65】表紙の絵を見て本を選んでいる子が多かった。（公共図書館・2000 年代）

【事例 66】字を読むこと、覚えることが苦手な小 2 の男子。絵本を読むことができるようになると、「読んで」「次はこれ読んで」と、棚にある絵本のタイトルを見て話を選んでもってくるようになる。最初の頃は、表紙の絵の雰囲気で選んでいた。（小学校特別支援教室・2010 年代）

文字が読めるようになっていても、表紙の見た目や雰囲気が本を選ぶ大きな要素になっている。ただ、表紙だけでなく、③で挙げるように中も合わせて確認していることもわかる。

② 本の形（サイズ）で選ぶ

【事例 67】小 1 か、小 2 のとき、『はじめてのキャンプ』（林明子作・絵　福音館書店）『みどりいろのたね』（たかどのほうこ作　太田大八絵　福音館書店）をよく借りていた。内容もさることながら、絵本のように大きくなくて、ページ数があるところが、「大きい子の読む本」みたいで好きだった。（文庫・1980 年代）

【事例 68】「ピーターラビット」のシリーズを面出ししておくと、低学年の児童が本のサイズに惹かれて次々と手を伸ばす。（学校図書館・2020 年以降）

“絵本”ではない本の形や厚み、手に取りたいサイズなど、今の自分が読むのにちょうどいい形をひとつのポイントにして本を選んでいる。手にとるものだからこそ得られる本の情報である。

③ めくって中の情報を得て選ぶ

【事例 65】書架に面展示している本の中から好みの絵の本を手に取り中をめくって面白そうと思った物を借りていっていた。（公共図書館・2000 年代）

【事例 69】小学 1 年の男の子。「字がたくさんある本を読みたい」と図書館へ来る。本をめくりながら「これ、字が多い」と借りたのは、「はれぶたぶんこ」シリーズ（矢玉四郎作・絵　岩崎書店）から選んだ 1 冊。（学校図書館・2020 年以降）

字の大きさ・多さや挿絵、文など、表紙や見た目だけでは分からない情報を、手に取って中を確認しながら選んでいる。試し読みだけでなく、本全体から受け取れる情報を使って選んでいるように見える。

④ 知っているものを選ぶ

【事例 70】クラスで借りに来た時。お昼の放送で読んだ絵本を「これが読んだ本です」とひと言紹

介。借りてくれた。（学校図書館・2020 年以降）
【事例 71】『もりのへなそうる』（わたなべしげお作　やまわきゆりこ絵　福音館書店）を開いて見ていた男児が、「エルマーと色ちがいのりゅうがいる」と友だちに見せていた。（学校図書館・2010 年代）
【事例 72】アーノルド・ローベルの『ふたりはともだち』や佐藤さとるの物語など学校教科書やテストなどで読んだものの続きを図書館に探しにくる子どもがよくいたように記憶している。（公共図書館・1990 年代）

一度読んだり、おはなししてもらったりした本を再度選ぶ姿は、乳幼児期に引き続き報告された。小学校では事例 70 でのお昼の放送や、事例 72 の授業など、学校生活のなかでも知るきっかけが増えている。また、同じ本を手にするだけでなく、事例 71 のようにそこからつながる本にも興味を持ち、手を伸ばしている。いずれにしても、幼児期と同様に、その本やおはなしの体験が楽しいものだったからこそ、選んでいるのだろう。

⑤ 好きな本を選ぶ
【事例 64】車が大好きな男の子。借りるのはいつも絵本以外の車の本（ノンフィクション）。（学校図書館・2020 年以降）
【事例 73】「ピーターラビット」のシリーズがお気に入り。（学校図書館・2020 年以降）
【事例 74】先生が自分の娘のために「おばけのアッチ」シリーズ（角野栄子作　佐々木洋子絵　ポプラ社）を借りて行く。子どもに頼まれたそう。（学校図書館・2020 年以降）
【事例 75】斉藤洋の「おばけずかん」シリーズ（斉藤洋作　宮本えつよし絵　講談社）を次々に借りに来ていた。「マジック・ツリーハウス」（メアリー・ポープ・オズボーン著　食野雅子訳　KADOKAWA）のシリーズに注力している子もいて、順不同で読めるシリーズものは、安心して（選ぶ冒険をしない）選べるのか、友だち同士で話題にしやすいのか人気がある。（公共図書館・2020 年以降）

自分の好きなものを、ジャンルや作者、シリーズのつながりで次々に選ぶ例も多い。事例 64 では「車」の実用書を、事例 73、74、75 では同じシリーズを手に取っていく様子がよくわかる。

⑥ 自分なりの手掛かりで本を探す
【事例 76】本棚で『いやいやえん』（中川李枝子作　大村百合子絵　福音館書店）を見つけて借りようとする。読まれ読まれて色も褪め、傷み激しい本。たまたま、買い替えた本が届いたばかりだったので、ここぞとばかり、新しい本を見せると、その子はじっと見比べたあげく、読まれ読まれてくたくたになった方を借りていった。ある母親が代わりに借りにきて、「きたない本借りてきてや、そういうのはおもしろいから」と子どもからの注文を伝えられたこともあった。（公共図書館・1979 年以前）
【事例 77】図書館の児童コーナーで文学の棚に並んでいる本から「この“マーク”（当時その出版社の幼年向けの本の背表紙についていた絵）の本が面白いんだよね」と本を選んでいる子がいた。（公共図書館・1990 年代）

事例 76 の「見た目がくたびれている本」こそ、みんなによく読まれた本で面白い、という経験則は、日ご

ろから図書館や文庫、園・学校などで共有された本を読み続けてきたなかで培われたのだろう。見た目でわかるため、家族にも伝えやすい本の選びかたになっている。

また、事例 77 も、「このマーク」の本が面白かったという読書経験がないと出てこない選びかたである。面白い本を見極めるための自分なりのポイントが定まってきている点が興味深い。

⑦ 他のメディアを入り口に本を選ぶ

【事例 78】図書館の貸出カウンターに『エルマーとりゅう』（ルース・スタイルス・ガネット作　ルース・クリスマン・ガネット絵　わたなべしげお訳　福音館書店）『エルマーと十六ぴきのりゅう』（同前）を持ってきたので、「『エルマーのぼうけん』（同前）はもう読んだの？」と聞くと、「うん。今日、学校でビデオ見た」という返事だった。（公共図書館・2000 年代）

アニメ化や漫画化など、他のメディアでのリメイクが読むきっかけとなることもある。別メディアの作品が魅力的であれば、原作やノベライズに興味を持つ相乗効果も期待できるのではないだろうか。この事例では、その続きを借りに来ているが、報告者も「続きを読もう、と思ってくれたのがうれしい出来事」とコメントしている。

2.2.2 どのように読むか

① 繰り返し読む

【事例 67】小 1 か小 2 のとき『はじめてのキャンプ』『みどりいろのたね』をよく借りていた。（文庫・1980 年代）

【事例 79】小学校で読み聞かせで（ボランティア）表紙を見せると「知ってるー！」と言う子がいるのはよくあること。複数の子が「知ってるー！」と唱えたので、敢えて「じゃあ、やめる？」と聞いてみたところ「えー！」「やめないでー」「読んでー」と次々に反論が。（教室・2010 年代）

【事例 80】ボランティアで年に 1～2 回児童館へブックトークをしに行った。終わったあと、紹介した本をすぐに手に取って読み始める子どもや「もう一回この絵本読んで」と言って、本を持ってくる子どもがいたりすることがある。（児童館・年代記入なし）

乳幼児と同様、読んだことのある本を繰り返して楽しむ姿は、低学年でも見られる。2.2.1 選ぶ④の、知っている本を選ぶ行為とのつながりも想起させる。

② 本に書かれたことが本当かと思う

【事例 73】「ピーターラビット」のシリーズがお気に入り。借りる時に「この本 100 年も前に書かれたんだよ」と伝えたら、「え～、その頃はうさぎがしゃべってたの？」と言った。（学校図書館・2020 年以降）

【事例 81】小 1 の甥っ子に昔話を朗読。読み終えると「これってほんとうにあったおはなし？」と聞かれた。「どうかなぁ」と相槌を打つと、「多分ほんとうだよ」と自分で納得していた。（家庭・2010 年代）

自分が生きる現実の世界と本の世界とが、分かれているようでどこかつながっている感覚を持った読みの事例。事例 73 や事例 81 のように、それが「ほんとう」だったのかを確認することや、逆に、自分がおはな

しの中に没入することで、おはなしを自分の「ほんとう」にすることもある。いずれの事例でも、本の世界と自分との距離がとても近い、または重なっていると考えられる。

③ 想像力を働かせながら読む

【事例 82】こどものとも『ぺにろいやるのおにたいじ』（ジョーダン文　吉田甲子太郎訳　山中春雄画　福音館書店）を読んでいた。自分もぺにろいやると鬼と一緒にテントの中でいろんな色の麦わらをよりわけているように感じていた。 当時は麦わらのストローでシャボン玉を吹いていたが、すぐに麦わらにヒビが入って吹けなくなったり、うつくしい麦わら細工の箱を持っていたこともあり、麦わらには大変思い入れが強かったことも覚えている。（家庭・1979 年以前）

【事例 83】女の子がテーブルに『マザーグースのうた　第 5 集』（谷川俊太郎訳　堀内誠一画　草思社）を広げて読んでいる。「うみがみんなひとつのうみだったら」のページ。「おおきな ひとが おおきな おので おおきな きをきったら どんなにおおきな みずしぶきが あがるだろう」と読んで、「すごい！」と大きく息をついた。（公共図書館・1990 年代）

②にも近い事例だが、読んだときに想像した世界が鮮やかで、より印象深い読書体験を得ている。

事例 82 では、本の登場人物と一緒にいて行動しているかのように想像し、感じていたことが伝わってくる。読書体験が実世界のものとも結びつき、思いを強めている様子も見える。

事例 83 では、自分が想像した世界に感嘆の声をあげている。ことばのイメージを自分で生み出すからこそ、その世界は無限なのだろう。

④ 集中して本の世界を共有し、楽しむ

【事例 84】おはなしの時間に『ちいさいおうち』（バージニア・リー・バートン文と絵　石井桃子訳　岩波書店）を読む。2 年生を中心に数人。読むうちに、絵本の絵が部屋の中に広がっていくふしぎな感覚を味わう。（公共図書館・1980 年代）

おはなし会など、一緒に読むことで本の世界にみんなで入りこむような楽しみの体験事例。集団でその世界を共有する読書は、一人で読むのとはまた違った喜びがある。

⑤ 子どもどうしのコミュニケーションのなかで読む

【事例 71】『もりのへなそうる』を開いて見ていた男児が、「エルマーと色ちがいのりゅうがいる」と友だちに見せていた。見せられた数人で、ページをめくって点検。「次、読むから早く回して」と言っていた。（学校図書館・2010 年代）

【事例 85】兄妹。兄が 6 歳、妹 3 歳くらいの頃。少しずつひらがなが読めるようになった兄が絵本を妹へ読み聞かせしていた。途中読めない字があったようだが、そこはとばしながら一冊読み切った。妹が真剣に絵本を見つめながら、兄の言葉をじっと聞いていた。（家庭・2000 年代）

【事例 86】小学 1 年生の女の子二人。学校で約束して文庫に来るようだ。文庫の棚に 2 冊並んでいる絵本を借りていく傾向があり、主導する子がその子の好みや家にある絵本を推薦している。（文庫・2020 年以降）

きょうだいや友だちなど、子どもどうしのコミュニケーションのなかで本が楽しまれ、読まれている。一緒に

読む、選ぶ、発見を伝えるなど、一人で読むだけではない本の介在のしかたが見て取れる。

事例 71 では、既知の本をきっかけに新しい本を発見したことを、友だちに知らせその発見とともに本を楽しんでいる。

事例 85 では、一心に妹に読み聞かせる兄の、妹に本を読みたいという気持ちと、真剣に絵本を見つめて聞き入る妹の、兄への尊敬の気持ちがぴったり重なっている様子がわかる。二人にとっては、絵本が相手とつながる大切なものになっているだろう。

事例 86 では、本に親しんでいる子の主導で一緒に文庫を利用し、本を選び読んでいる。2 人の関係性が、読書にも影響を与えている。

誰かとともに過ごす日常のなかで、子どもは読書体験を重ねている。

⑥ 読んでもらって楽しむ

【事例 87】本棚に本を戻しにいき、たまたまそこにいた手持ちぶさたらしい男の子に、ふと書架の 2 段目にあった『くまのパディントン』（マイケル・ボンド作　ペギー・フォートナム画　松岡享子訳　福音館書店）をしゃがんだまま読み始める。気に入れば手にとるか、とちゅうで離れていくかと思いきや、ずっと聞き続けるので、ついにテーブルに移って 1 章を読み終える。（公共図書館・1979 年以前）

自分で読むには少しハードルの高い本も、読んでもらうことで楽しめる。特に文字を読み始める低学年は「読んでもらう」ことで楽しめる本の幅を大きく広げることができる。この男の子も、たまたま「読んでもらえた」ことで、新たな楽しい本とであえたのかもしれない。

⑦ 自発的な読みへの移行

【事例 88】『百まいのきもの』（エリノア・エスティーズ作　ルイス・スロボトキン絵　石井桃子訳　岩波書店）の本を数ページよんだあと、疲れていた私は眠くなり「明日続きね」と、読むのをやめた。翌日、帰宅したあと長女が寄ってきて、「お母さん、あの本もう読まなくていいよ！自分で読んだから」と言った。驚いている私に、「やっぱり、いいおはなしだったよ！」と、満足そうに報告してくれた。（家庭・1990 年代）

読んでもらっていた本の続きを自分で読むという行動はよく耳にする話。読んでもらうのが待ちきれない気持ちが、少しずつ読めるようになった子どもの読書を引っ張っている。この事例では、読み終えた達成感とともに「いいおはなしだったよ」と報告する子どもの喜びが伝わってくる。

⑧ 読み聞かせを通した「読書」の成長

【事例 66】字を読むこと、覚えることが苦手な小 2 の男子。小 2 の 1 学期から支援学級に籍をおく。字を覚えることが困難な彼は、パソコンで一行日記を書き、赤ちゃん絵本や紙芝居を読んでもらう、ということから始める。彼にはパソコンを使うこと，赤ちゃん絵本や紙芝居を読んでもらうことが大変な喜びになった。3 学期、字を覚え、絵本を読むことができるようになると、「読んで」「次はこれ読んで」と、棚にある絵本のタイトルを見て話を選んでもってくるようになる。最初の頃は、表紙の絵の雰囲気で選んでいた。そして、字が読めるようになると、「読んでもらう」喜びから「一緒に読む」喜びへと変わり、ついに「読んであげる喜び」へと移っていった。（小学校特別支援教室・2010 年

代）

読んでもらうことから読書の楽しさを知り、やがて自分で読むことの楽しさを知っている。字が読める、書けるようになることのうれしさを生み、支えたのは読書の楽しさかもしれない。

⑨ 「自分の本」として楽しむ

【事例 89】兄弟で来て、同じ絵本を 2 冊借りていった。「ケンカせんでええやろ」と言っているのを聞いて、なるほど、と思った。（公共図書館・2000 年代）

家庭で、なぜか同じタイミングで 1 冊の本を取り合ってけんかし、所有権を主張する姿を見たことがあるが、おそらくこの兄弟も似たようなけんかをしたことがあるのだろう。「もの」ならではの解決法で、自分が読みたいときに読める「自分の本（もの）」としてあることが大切だったのがわかる。

2.2.3 その他

本を選ぶ、読むに該当しない事例をここでは取り上げる。

① お話を取り込んだごっこ遊びをする

【事例 90】台所を締め切って、兄弟二人、『ムッシュ・ムニエルとおつきさま』（佐々木マキ作　絵本館）のニッチモ博士とサッチモ博士の実験室のページを開いて、それを手本に、調味料や器具を並べて実験ごっこで遊ぶ。（家庭・1990 年代）

お話の世界を自分たちで再現するごっこ遊びは、乳幼児だけでなく、低学年でも事例があった。同じ本を共有できる相手がいることで、「遊ぶ」楽しみが加わり、物語を起点に想像の世界が大きく広がっている。

② 読書の記憶が五感（匂い）と結びつく

【事例 91】小さい頃から図書館に来ていて、もう 20 歳前後になる男性に、子どもの頃に読んで思い出に残っている本があるかを聞いたことがある。彼は絵本の書架に行き、『おばけのてんぷら』（せなけいこ作・絵　ポプラ社）を私に見せて「たぶん、この絵本だったかな？」と言った。そして、匂いをかぎ「間違いない、この匂いだ」と言った（匂いで読んだ本を記憶していた）。（公共図書館・1990 年代）

本そのものの匂いを記憶していたことは驚きだが、本を読んでいるときは、その本の中身だけを読んでいるわけではない、ということがわかる。音、空気、匂い、周囲のあらゆるものを全身で受けとめながら子どもは本を読んでいる。

③ 読んだ本や体験を伝えたい、共有したい

【事例 75】斉藤洋氏の「おばけずかん」シリーズを次々に借りに来ていた。「マジック・ツリーハウス」のシリーズに注力している子もいて、順不同で読めるシリーズものは、友だちどうしで話題にしやすいのか人気がある。（公共図書館・2020 年以降）

【事例 92】 小学校 1 年生。小学校へ朝の読み聞かせに行った週末、勤務先の図書館に「こないだ読ん

でくれた本ある？」と借りに来てくれた。「自分でも読んでみる？」と聞くと、「面白かったから、家族にも見せてあげたいんだ」とうれしそうに借りていってくれた。（公共図書館・2020 年以降）

自分が読んだ本や、面白かった体験を友だちや周りの大人に伝えて、共有したいと行動する事例もあった。

事例 75 のように、人気のあるシリーズは、友だちとどれを読んだか、おすすめかなどをすぐに共有して話しやすく、それも楽しさのひとつになっているのかもしれない。

また、事例 92 では、自分が面白かった本を家族にもぜひ教えたい、見せて一緒に面白さを共感してほしいという強い気持ちが伝わってくる。

④ 大人の手助け・働きかけ

【事例 65】図書館職員があらすじを紹介したり、面白いポイントを説明すると興味を持って読んでくれる子が多かった。（公共図書館・2000 年代）

【事例 66】字を読むこと、覚えることが苦手な小 2 の男子。小 2 の 1 学期から支援学級に籍をおく。字を覚えることが困難な彼は、パソコンで一行日記を書き、赤ちゃん絵本や紙芝居を読んでもらう、ということから始める。赤ちゃん絵本や紙芝居を読んでもらうことが彼の大変な喜びになった。（小学校特別支援教室・2010 年代）

【事例 80】ボランティアで年に 1～2 回児童館へブックトークをしに行った。終わった後紹介した本をすぐに手に取って読み始める子どもや「もう一回この絵本読んで」と言って、本を持ってくる子どもがいたりすることがある。（児童館・年代記入なし）

【事例 87】本棚に本を戻しにいき、たまたまそこにいた手持ちぶさたらしい男の子に、ふと書架の 2 段目にあった『くまのパディントン』をしゃがんだまま読み始める。気に入れば手にとるか、とちゅうで離れていくかと思いきや、ずっと聞き続けるので、ついにテーブルに移って 1 章を読み終える。（公共図書館・1979 年以前）

多くの事例において、周辺の大人の手助けや働きかけが、この年代の子どもと本がつながるうえで大きな役割を果たしていた。

事例 65 や 80 のように、直接本を紹介することや、事例 87 のように図書館員のフロアワークでのふとした読み聞かせから、あるいは事例 66 のように、一人の子どもにずっと寄り添い、読み聞かせを続けて読書体験を育むなど、大人がそれぞれの場で、子どもと本のであいの種をまくことの大切さが再確認できる。

⑤ 読み聞かせの中に愛情を求める

【事例 93】放課後の子どもの居場所で。家庭が複雑で、一緒に暮らしながらも親や兄弟の温かみからほど遠い生活をしている小 1 の男子。遊びの時間に、友だちから外れてしまいボランティアの大人に絵本を読んで、とせがむ。最初、自分が一番読んで欲しい絵本、終わると「次はこの本」「次はこれ」と、時間が経つにつれて長いおはなしの絵本へと移る。一時でも自分から大人が離れないようにと願って。絵本を読んでもらっている時の彼はまるで夢を見ているような表情であった。（放課後の子どもの居場所・2010 年代）

「読み聞かせ」をしてもらっている時間は、自分に向き合ってもらえることを知ったうえで、本を読んでくれ

るようにせがむ。大人にそばに長くいてもらえるならば、本でなくてもよかったのかもしれないが、その子が本を使ったことで、幸せな読書体験に、またその先の日常に「本」の居場所もできたのではないだろうか。

報告者からは「自分だけに絵本を読んでもらうことなど家庭では全くない、静かに絵本を読むことはできない環境に暮らす男の子が、優しい大人がそばにいて読んでくれる、また、優しい大人の誰かと一緒に読むということは大変幸せな時間だったし、自分で静かに落ち着いて絵本を読むことができる時間が放課後の居場所にはあった。」というコメントもなされた。

⑥ 褒められたくて読む

【事例 69】小学 1 年の男の子。「字がたくさんある本を読みたい」と図書館へ来る。本をめくりながら、「あ、これ、字が早い！」と選ばなかったのは『おおきな木』（シェル・シルヴァスタイン作・絵 ほんだきんいちろう訳　篠崎書林ほか）。私が「字が早い、ってどういう意味？」と尋ねると、「えーっとね、字が少ないから、早く読めるって意味。」彼は、字が多い本を選ぶ（読む）＝（選書を）（読書することを）褒められるということで、字が多く書かれている本を借りていく。（学校図書館・2020 年以降）

「字が早い」というユニークな表現に、彼の確たる選択基準が見える。「ほめられる」ことだけが本を読む理由になると、ほめる側の基準で本を選んでしまうのかもしれない。選択基準のひとつであったにせよ、選んだ 1 冊が楽しんで読める本であってほしい。

2.3. 小学校中・高学年編

小学校中・高学年の読書については中学年 18 件、高学年 8 件の報告があった。

2.3.1 どのように選ぶか

① 表紙で選ぶ

【事例 94】男の子と女の子が来て「"ももたろう"の本をさがしている」というので、書架へ連れて行くと、男の子は「新・講談社の絵本」シリーズの昔風の絵本を選び、「こっちがいい！こっちの方が男前や！」と言う。女の子は福音館書店の絵本を選び「えー。こっちでいいやん」と言う。男の子は「おれは"イケメン"でいく！」と言って借りていった。（公共図書館・2000 年代・中学年）

同じタイトルの昔話を表紙や挿絵で選んでいる。

事例 94 では表紙に描かれた登場人物の姿（かっこよさ等）で選んでいるが、その好みは子どもにより異なる。これは絵本を選ぶ際の事例だが、物語を選ぶ場合も表紙から選ぶ行動が見られる。

子どもにとって表紙、特に主人公の容姿は物語を想像しながら読み進める上で重要だと思われる。（表紙のイラストが気に入って本を購入することは「ジャケ買い」と言われている。中学年だけでなく中高生や大人も表紙に影響されることが分かる。）

② 知っているものを選ぶ

【事例 95】放課後友だちと公共図書館に来るたび、学校で読んだ本を探していた。（公共図書館・2010 年代・中学年）

【事例 96】お昼の放送の「やかまし村」シリーズ（アストリッド・リンドグレーン作　大塚勇三訳　岩波書店）を聴いて「一年生の弟が気に入ったから読んであげる」と借りて行った。（学校図書館・2020 年以降・中学年）

事例 95 では、「学校で読んだ本」を、公共図書館でも探している。低年齢層（乳幼児）が自宅にある絵本を図書館でも選ぶ感覚に近いのかもしれない。（気に入って何度も読みたいから、内容やグレードが分かるため安心して読めるからなど、複数の理由が考えられる）

事例 96 では、学校放送の読み聞かせをきっかけに選んでいる。しかも、自分ではなくその本を気に入った弟のために選んでいる。学校放送での読み聞かせが、子ども自身がきょうだいに読み聞かせをするという行動につながっている。学校放送による耳からの（「聞く」）読書の楽しさをきょうだいで共感している（したいのだということ）ことが分かる。

③ 好きな本（読みたい本）を選ぶ

【事例 97】いつも首に赤いスカーフを巻いた男の子が、来るたびに乗り物の棚から飛行機の本を借りていた。（公共図書館・2000 年代・高学年）

【事例 98】「電子書籍には自分が読みたいと思うものがない、紙の本の方が読みたいものがいろいろある」という児童（本を読むことが大好きな男子）もいる。この児童は、厚い本であっても自分が興味あるならば抵抗なく借りていく。（学校図書館・2020 年以降・高学年）

事例 97 では、特定のジャンルの本、興味のある対象に関する本を繰り返し選んでいる。この事例では「飛行機」だが、「電車」、「妖怪」、「昆虫」、「鳥」などの図鑑や事典系の本を繰り返し借りていく子どもがいる。さらに詳しく知りたいため、一般向けの図鑑にまで手を伸ばし、特定の分野にとても詳しくなる子どももいる。

事例 98 では、読書好き（大好き）な子どもが、「電子書籍には自分が読みたいと思うものがない」との理由から紙の本を選んでいる。厚い本であっても自分が興味あるならば抵抗なく選んでいるところから、子どもの好奇心に応える充実した読書環境が必要だと分かる。

④ 自分なりの手掛かりで本を探す

【事例 99】岩波少年文庫の堅牢版のシリーズが新着棚に並んでいたとき、その中から 1 冊を借りた男の子。それ以後ずっと、新着棚の岩波少年文庫から選んで借りていた。（公共図書館・1990 年代・中学年）

【事例 100】文庫に来た小学 3 年生の孫が、突然「私、本の虫やねん」と一言。聞けば学校でも休み時間が待ち遠しく、図書室へと行くのだと言う。誕生日のプレゼントには教科書で知った本などをねだる。（文庫・2020 年以降・中学年）

事例 99 は、新着本の棚にあったシリーズ（岩波少年文庫）の 1 冊を選んだことがきっかけとなって、同じシリーズの本を何冊も選んでいるという事例である。1 冊ごとに作者も内容も異なっているが、同じ装丁（形態）のものは面白いという信頼がそのシリーズにあるからだと思われる。低学年 2.2.1⑥でも、背表紙の特徴で本を選ぶ事例がある。

事例 100 では、教科書で知った本をプレゼントにねだって（選んで）いる。国語の教科書などに紹介されている、単元の関連図書のことであろう。

⑤ 薦められた本を選ぶ

だれが薦めてくれたのか、対象別に見ていく。

＜友だちから＞

【事例 101】『時計坂の家』（高楼方子作　千葉文子絵　リブリオ出版）を手にしてじっと表紙を見ていた子に、横から友だちが「たかどのほうこかなあ？」と声をかけていた。厚い本に躊躇していたが、高楼方子にすすむきっかけになっていた。（学校図書館・2010 年代・高学年）

【事例 102】低学年の頃から、読みに苦手意識が強く、活字図書の読書とマルチメディアデイジーを併用しており、親の読み聞かせも続いている。最近では、本好きの友だちのお薦めで、『旅のはじまり（黒ねこサンゴロウ１）』（竹下文子作　鈴木まもる絵　偕成社）、『選ばなかった冒険』（岡田淳作・絵　偕成社）など活字の読書もしている。（家庭・2020 年以降・中学年）

事例 101 では、自分には読むのが難しいと思っていた本を、友だちが興味を示したことがきっかけとなり選んでいる。友だちが、自分には難しいと思った本に挑戦するきっかけになった事例は他にも見られる。

事例 102 は、読書は苦手で、マルチメディアデイジーや読み聞かせを続けてきた子どもの事例である。友だちに薦められたことが、紙の本の読書につながっている。

＜先生から＞

【事例 103】放課後次々来る小学生が『ほしほしこぞう』という本を探していた。担任の先生からすすめられたという。よく聞くと『ほしいほしい小僧』（前川康男文　油野誠一絵　フレーベル館）のことだった。（公共図書館・1980 年代・中学年）

【事例 104】教室でブックトークをした。また、子どもどうしでグループを作ってブックトークをした。紹介された本を、子どもたちはよく読んだし、その後、本を自分で選ぶ際にも、作者つながり、テーマつながりで探す姿があった。（教室・2000 年代・中学年・高学年）

事例 103 は学校の先生に薦められた本を選んでいる事例である。事例 104 では先生だけでなく、子ども同士でもブックトークをしていて、子どもたちは紹介された本をよく読んでいる。また自分で本を選ぶ際にも作者つながり、テーマつながりなど、ブックトークで紹介するパターンで選ぶ子どももいると報告している。

＜学校図書館司書・司書教諭から＞（学校図書館で）

【事例 105】読み応えのある本をたくさん読んでいる女の子。もう少し背伸びしても大丈夫だと考え本を貸出している。現在、「ステフィとネッリの物語」シリーズ（アニカ・トール著　菱木晃子訳　新宿書房）を終え、「ペンダーウィックの四姉妹」シリーズ（ジーン・バーズオール著　代田亜香子訳　小峰書店）に入っている。続編を手渡された時の彼女の嬉しそうな顔を見るとこちらも嬉しくなる。（学校図書館・2020 年以降・高学年）

【事例 106】「先生のお薦め本を教えてください」と言って借りて行く。返却時に「続きもあるんだよ」 と紹介すると借りて行く。「エーミル」シリーズ（アストリッド・リンドグレーン作　石井登志子訳　岩波書店）、「ミルドレッドの魔女学校」シリーズ、「チム・ラビットのぼうけん」「チム・ラビットのおともだち」（アリソン・アトリー作　石井桃子訳　童心社）など。（学校図書館・2020 年以降・中学年）

事例 105、106 は学校図書館で学校図書館司書もしくは司書教諭から薦められた本を選んでいる。子どもの読書体験や傾向を理解した上でその子どもの嗜好（好み）に合わせた本、成長に合わせた本を選んで薦めており、それが子どもの読書を豊かなものにしている

事例 105 では、読後に続編を（薦められて）選んでいる。気に入った物語の続編やシリーズに手を伸ばす子どもは多い。

事例 106 では、繰り返しお薦めの本を聞いて選んでおり、身近に本に詳しく、一人ひとりの子どもにあった、適切な本（おもしろい本）を薦めてくれる人（学校図書館司書・司書教諭など）がいることで、読書の幅を広げていることが分かる。学校図書館にいる先生（学校司書、司書教諭等）に、おもしろい本をたくさん知っているという信頼感から尋ね、先生はその期待に応え続けることができているからこそ、お薦めの本を繰り返し聞かれるのである。

＜文庫の主宰者から＞（文庫で）

【事例 107】コロナ禍で、文庫を開いていたときに「お薦めは？」と聞かれたので、5～6 冊紹介すると、30 分くらい吟味し、3 冊厳選して持ち帰った。『けっこんをしたがらないリスのゲルランゲ』（J・ロッシュ=マゾン作　堀内誠一画　山口智子訳　福音館書店）、『森のなかの海賊船』（岡田淳作・絵

理論社)、『ユメミザクラの木の下で』(岡田淳作・絵　理論社)(文庫・2020 年以降・中学年)
【事例 108】小学 3 年生のとき、「やかまし村」シリーズ(アストリッド・リンドグレーン作　岩波書店)を文庫ですすめられた。背文字が四角い感じで、表紙も堅そうな感じで、難しそうな気がして、それまで手に取ったことがなかったのだが、本を開いてみたら、自分でも読めて、しかもおもしろいので、とてもびっくりした。(文庫・1990 年代・中学年)

事例 107 と 108 は本をよく知っている、文庫の主宰者への信頼により、薦められた本を選んでいる。

事例 107 では自ら希望して薦めてもらい、その中から選択している。

事例 108 では、通常、自分では選ばない形態(外観)の本を薦められ、面白さに驚いたという、自分だけではであえなかった本とのであいにつながっている。

文庫の主宰者は、子どもたちをさりげない様子で見守りながらも、よく観察している。文庫の本と子ども一人ひとりをよく知る大人が子どもと本をつないでいる。

＜公共図書館司書から＞(公共図書館で)

【事例 109】長い物語の好きな 4 年生の女の子に「なにかおもしろい本がないか」と聞かれ、『お姫さまとゴブリンの物語』(ジョージ・マクドナルド作　脇明子訳　岩波書店)(岩波少年文庫)をすすめた。少女漫画のような表紙に、ちょっと引いた様子だった。自分も子どもの頃に同じ反応をしたことがあるので、その気持ちがよくわかり、「中の挿し絵は違う人だから大丈夫」と見せたところ、借りていった。気に入ったらしく、後日、続編の『カーディとお姫さまの物語』(ジョージ・マクドナルド作　脇明子訳　岩波書店)も借りに来た。(公共図書館・2000 年代・中学年)

事例 109 は、公共図書館司書にお薦めの本を聞いたことから、自分では選ばないような本とであえた事例である。自分では選ばないタイプの本を薦められて、満足するケースは前述の事例 108 にもあった。どちらも、子どもと本をよく知り、子どもと本をつなぐことができる大人が介在している。

学校図書館、文庫、公共図書館では、子どもが自ら「お薦めの本を紹介してほしい」とアプローチしている。それは、本をよく知っているという信頼と、子どもによりそう雰囲気(姿勢)を子どもが感じているからではないだろうか。一人ひとりの子どもと本をつなぐことができる大人の存在は、重要だと思われる。

⑥ 調べるため(課題を解決するため)の本を選ぶ

【事例 110】学校でニワトリを飼いたいので、と友だちとニワトリの飼育の本を探して借りていった。食肉の本を見せると、これではない、と戻された。(公共図書館・2010 年代・中学年)
【事例 111】学校図書館で 4 年生の男の子から「手話の本はどこにありますか？」と尋ねられた。理由を聞くと「今、給食の時間が黙食だから、何かコミュニケーションがとれないかと思って」と答えたので、3 類の本棚に一緒に行き、何冊かを紹介した。その後、その中の 1 冊を借りて行った。(学校図書館・2020 年以降・中学年)

事例 110、111 とも、課題を解決するために調べることができる本を探し、選んでいる。読み物ではなく、調べ物のための本の選択である。調べるためのツールとしての本がある公共図書館や学校図書館を訪れている。

⑦ 家庭にある本から選ぶ

【事例 112】小学 6 年生の時（1996 年頃）、それまでは漫画や、漫画のような挿絵のついたライトノベルズばかりを読んでいたが、たまたま家の本棚に並んでいた『モモ』（ミヒャエル・エンデ作　大島かおり訳　岩波書店）をなんとなく手に取り読み始めた。冒頭から引き込まれて読みふけったが、あまりの面白さに、ずっとこの物語の世界に浸っていたいと思い、後半以降は、ページの残りを気にしながら、毎晩少しずつ読んだ。読み終わってみると、本の表紙にあるお世辞にもかわいいとは言えないモモの後ろ姿に、何とも言えない親しみがわいた。子ども心に、この本はこれまでに読んでいた本の隣には並べたくないと感じて特別の場所を作った。（家庭・1990 年代・高学年）

事例 112 では、家の本棚から本を選んでおり、その本が思いがけずとても面白く、特別な本となっている。家庭に面白い本があるという読書環境が本とのであいをもたらした事例である。

⑧ 他のメディアを入り口に本を選ぶ

【事例 113】YouTuber が紹介していた自己啓発本を小学生が探していた。（公共図書館・2010 年代・高学年）

【事例 114】友だちが漫画雑誌『なかよし』（講談社）を貸してくれた。付録で『そして五人がいなくなる』（はやみねかおる作　講談社）の前半を漫画化したものを読み、続きが読みたくて、図書館で原作を借りて読んだ。初めて物語の本を読むきっかけになった。（家庭・2000 年代・中学年）

事例 113 では YouTuber が紹介していた本を選んでいる。特定の YouTuber にあこがれ、その人が薦める本を選んでいると思われる。インターネットに公開されている情報の中から、小学生が自らアクセスして YouTuber の薦めている本を見つけている。

事例 114 では、原作のある漫画を読み、漫画化されていない続きを読みたくて原作を探して（選んで）いる。漫画にかぎらず、ドラマ化（例：「インガルス一家の物語（大草原の小さな家）」シリーズ（ローラ・インガルス・ワイルダー作　ガ―ス・ウィリアムズ画　恩地三保子訳　福音館書店）、「ミルドレッドの魔女学校」シリーズ（ジル・マーフィ作・絵　松川真弓訳　評論社）、映画化（例：「ハリー・ポッター」シリーズ（J.K.ローリング作　松岡佑子訳　静山社））など、異なるメディアになった本（原作）に興味を持つ子ども（大人も）がいる。

⑨ 無料の Web 漫画と図書館

【事例 98】小学 5 年生の男子児童に、「スマホで漫画とか読む？」と尋ねると、複数の児童が「無料で読める漫画はいろいろ読むけど、有料のマークが出たら止める。無料のものしか読まない。」という。「この先を読みたいと思うけど、お金を払うことになったら親に怒られるから･･･」。誰のスマホで読むか尋ねると「親」という。親のスマホで無料漫画を読む、と答えた児童は、図書館から借りる本も「漫画で読む〇〇」というものが多いと感じる。（学校図書館・2020 年以降・高学年）

近年（2020 年以降）の電子書籍の利用に関する小学 5 年生の事例である。複数の子どもが保護者（親）のスマホで「無料」の漫画を選び、読んでいる。ただし、漫画の続きが有料になると、読みたくても選べなくなる（読みたくても読めない）。また、「無料」の漫画を選んでいる子どもは、図書館で本を選ぶときにも漫画（「漫画で読む〇〇」）を選びやすく、活字だけの本を敬遠する傾向があるようだとの見解をコメントしているが、「無料」で利用できる図書館の存在が、子どもたちの読書環境を支えていることに、あらためて気づ

かされる。また、読書習慣（スマホで漫画を読む、紙の本を読むなど）の違いにより、本の選び方や嗜好に違いが生じる可能性がある。

2.3.2 どのように読むか

① 繰り返し読む

【事例 115】「エルマーのぼうけん」シリーズの順番を教えると、「うん。知ってる。一回読んだもん。ええ本は何回読んでもええんやで」と言っていた。（公共図書館・2000 年代・中学年）

【事例 116】『魔術師のおい（ナルニア国物語 6）』（C．S．ルイス作　瀬田貞二訳　岩波書店）を借りようとしていたので、『ライオンと魔女（ナルニア国物語 1）』（C．S．ルイス作　瀬田貞二訳　岩波書店）が最初だと声をかけると、「知ってる。前はシリーズの順番に読んだ。こんどは作者が書いた（年代記）順に読もうと思って。」（公共図書館・1980 年代・高学年）

2 事例とも、子どもたちに支持され、読み継がれてきた物語のシリーズを繰り返し読んでいる。

事例 115 では、気に入った物語シリーズ（『エルマーのぼうけん』）を良い本と考え、繰り返し公共図書館から借りている。

事例 116 は、読んだことのあるシリーズの物語を再読するために選んでいる。知っている本の再読ではあるが、異なる順番で読むという違う楽しみ方をするために選んでいる。

② 自分が読みやすい媒体で読む（紙媒体と電子媒体）

【事例 99】低学年の頃から、読みに苦手意識が強く、活字図書（紙媒体）の読書とマルチメディアデイジー（電子媒体）を併用しており、親の読み聞かせも続いている。デイジーだと様々なレベルのお話を楽しめるため、『冒険者たち』、『びりっかすの神さま』などを聞いていた。本好きの友だちが「読んでもらうより自分で読む方がよい」と言っていたようで、息子はとても驚いていた。（家庭・2020 年以降・中学年）

【事例 117】2020 年 3 月（小 5）。コロナ禍で休校になったため Kindle を購入。Unlimited（読み放題）を契約。読んでいた本は、ドラえもんなどの漫画、角川つばさ文庫。
2021 年 3 月（小 6）。Unlimited 無料が 1 年間で終了。ベネッセのタブレットを使用していたので「まなびライブラリー」を読み始める。加えて紙の本も手に取るようになる。電子媒体では、角川つばさ文庫やノンフィクションなどいろいろ。紙の本では、『ペニーの日記読んじゃだめ』（ロビン・クライン作　アン・ジェイムズ絵　安藤紀子訳　偕成社）媒体は紙の本へ。読んでいる本「名探偵カッレくん」シリーズ（アストリッド・リンドグレーン作　尾崎義訳　岩波書店）、『Wonder ワンダー』（R・J・パラシオ作　中井はるの訳　ほるぷ出版）。（家庭・2020 年以降・高学年）

【事例 118】姪がコロナ禍で、某通信教育の教材で電子図書館が入っているタブレットを手に入れた。いわゆる普通の電子書籍ではないが、電子図書館に入っているグラフィックノベルみたいなものを読んでいた。その読み方がパラパラと見ると一話が短くて、はいおしまい。次の話。パラパラ、次へ…。同じ話を次々に読んでいるのかと思ったら、そうではなくて、パラパラみたら次の本、ササササと読んだら次へ…。彼女が本棚で背表紙を見て、中を見て 1 冊を選ぶ動きと違い、そのタイトルの飛び方、選び方のスピード感に驚かされた。（家庭・2010 年代・中学年）

事例 99 は「読むことが苦手」な子どもがマルチメディアデイジーから選んでいる事例である。読んでもらうより自分で読む方がよい」と感じる子どもと、耳で読む（聞く）読書を楽しむ子どもがいることも分かる。

デイジーやマルチメディアデイジーから選ぶことができる環境や選ぶためのサポートがあれば、「読むことが苦手」な子どもが本を選んだり楽しんだりすることができる。

事例 117 は 2020 年以降の電子書籍利用の事例である。「Kindle」Unlimited（期間が限定された読み放題）と「まなびライブラリー」（進研ゼミ会員が利用できる電子図書館）を 5 年生から 6 年生にかけて利用している。はじめに利用した Kindle では、「ドラえもん」や「角川つばさ文庫」など、漫画や、表紙や挿絵のイラストが漫画に近いもの、内容が軽快なものを選んでいるが、「まなびライブラリー」では、角川つばさ文庫の他にもノンフィクションなどいろいろ選んでいる。「まなびライブラリー」は子どもの学習をサポートするサービスであるため、子どもが興味を持つ電子書籍のラインナップを効果的に表示しており、選びやすくなっているようだ。そのため、読書の幅が広がったのではないだろうか。6 年生になると「まなびライブラリー」で電子書籍を読むだけでなく、紙の本も選んで読むようになっている。

報告者は、「娘は「細かい文字は苦手」と言っていたのでディスレクシアかと思ったこともあった。今はそのような困難さは見られません。（コロナ禍で休校になり Kindle を購入）ただ、電子で読んで文字の大きさをかえたりしながら読むことに慣れていったのかもしれない。紙の本に最初苦手意識がある場合、電子もなんらかの助けになるのかなと感じている」とコメントしている。

事例 118 は、タブレットでお話を読む事例である。次々とお話を選び、パラパラ見たり、ササササと読んだりというのは、タップしたり、フリック（スワイプ）したり、気の向くままに操作しながら読んでいるということであろう。身近にあるタブレットが読書の入り口になっている。これは 2010 年代の事例だが、現在（2020 年代）は、タブレットが授業に用いられるようになった。子どもたちにとってさらに身近なツールとなりつつあるタブレットは、新しい読書の入り口になるが、一方で個々の本の選びかた、読みかたにも変化があるのかもしれない。

2.3.3 その他

① コミュニケーション（伝えたい）

【事例 101】小学 3 年生の孫が「わたしの木」という宿題に「（私の）心の中にはお話の木があります。それは今まで読んできた本でいっぱいです。本を読むのはとっても楽しいです。だからみんなにも読んでほしいです。これからも木の本をふやしていきます。」と書いていた。（文庫・2020 年以降・中学年）

【事例 119】『グリム童話集』の「三人の旅職人」のページを開いて見せて、三人の貧しい職人が悪魔と約束をし、「わしら三人とも」「お金で」「そのとおり」と言うことで、最後に宿屋の主人の悪事をあばき、悪魔がその魂を手に入れる、構成のすごさ、みごとさを詳しく話してくれた。（公共図書館・1980 年代・中学年）

事例 101 のように、読書を（他者に）薦めたいと考えている子どももいる。「みんなにも読んでほしい」という理由を「本を読むのはとっても楽しい」からだという表現はとても明解で、伝えたいと思う理由に通じるものではないだろうか。

事例 119 は読んだ本を公共図書館の司書に話してくれた子どもの事例である。

子どもが読後に本の内容（心を動かされた体験）を友だちや家族など親しい人に伝えることはよくある。感動した本を親しい人に教えたい、物語を共有したい、共感してほしい、という思いから伝えているのだろう。

2.4. 中学・高校生編

中学生・高校生の読書についてはそれぞれ 12 件、5 件の事例があった。

2.4.1 どのように選ぶか

① 視覚で選び、試し読みをする

【事例 120】読みたい本をどのように探しているか聞いてみたところ、書店や学校図書館、公共図書館で展示してあるものや本棚にあるものからタイトルや表紙が気になるものを抜き出し、中身を少し読んでみて興味が持てるかどうかで選んでいるとのことだった。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

視覚的な情報から気になったものを手に取り、中を見て選ぶという一連の流れから、ものとしての本が発する情報全てを選ぶ材料にしていることがわかる。目の前に本があることが前提での選びかたで、自分で自分がなにを面白いと思い、感じるかの判断基準を持っていることがわかる。

② 手軽に入手できる情報から自分で選ぶ

【事例 121】自分の中学生時代、なにかおもしろい本が読みたいと思っても、どんな本がおもしろいのか、手掛かりが全くなかった。学校の図書室に行く時間もなく、公共図書館は広すぎて、どこにおもしろい本があるのか、誰に聞けばいいのかもわからない。書店でもらえる新潮文庫や角川文庫の夏のパンフレットや、読んだ本の巻末にある他の本の紹介などを手掛かりにしていた。（場所記入なし・1990 年代・中学生）

先の例（事例 120）とは対照的に、先に現物の本以外から情報を得て読みたい本を選んでいる。時間や選ぶための情報が足りないと感じながらも、身近で得られる情報を本選びの参考にしている。様々な情報源を利用し、効率よく本を選択している様子がわかる。

③ 無料あるいは安価で手軽に入手できるものを読む

【事例 122】電子辞書を授業中の隙間時間にいじって収録されている文芸作品を読んでいた。太宰治、梶井基次郎など短編をよく読んだ。（家庭・2010 年代・高校生）

【事例 123】姉が近代文学を元にした WEB マンガを読んでいたため、自分も読み始めた。そこから近代文学に興味をもつようになり、調べているうちに青空文庫を知った。当時は学生だったこともあり、無料で幅広い文学作品に触れられる青空文庫は利用する機会が多かった。（家庭・2010 年代・高校生）

【事例 124】女子生徒にスターツ出版文庫が人気。中学生はスマホの使用に制限がある場合も多く、紙の本で楽しむ生徒が多いが、（このシリーズは）値段も安価なので、おこづかいで毎月のように買えるようだ。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

読む作品の選択肢は限られるが、「手軽で」「すぐ」読める機器やメディアを使い、そのなかから選んで読んでいる。時間の制約が多い中高生にとって、手軽に手に取れること、すぐ読めることは選ぶ際のメリットになっているのかもしれない。

事例 123 の無料でインターネット環境があればすぐに読める青空文庫は、自由のきく便利な読書材なのだろう。興味のあるジャンルが青空文庫にも多く収録されているのであれば、宝の山のように思えただろう。青空文庫に限らず、小説サイトなど、Web 上で提供される無料の作品は、紙の本よりも気軽に手を伸ばして読まれている可能性が高い。

事例 124 は「自分のおこづかいで買える」ものを選んでいる。

ここでは、紙・電子のいずれにおいても、本を読むうえで「お金がかからない」ことが選択のポイントになっている。無料で好きに読めるはずの学校図書館、公共図書館とどう使い分けているのか（あるいは時間的に使えないのか、読みたい本がないのか、別の理由があるのか）も気になる点である。

④　他のメディア（Web/SNS/動画サイト/アニメ等）を入り口に本を選ぶ

【事例 123】姉が近代文学を元にした WEB マンガを読んでいたため、自分も読み始めた。そこから近代文学に興味をもつようになり、調べているうちに青空文庫を知った。（家庭・2010 年代・高校生）

【事例 124】YouTuber や YouTube と連動した本は男子にも女子にも好まれ、お薦め本に選ばれることも多い。他の電子メディアから紙の本になったものを読んでいる。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

【事例 125】アニメ化されることが、小説を読むことにつながっている。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

【事例 126】「小説家になろう」のような無料で読めるもの（小説サイトの小説）を書籍化した本のリクエストを受ける。サイトで書籍化を知って、本で読みたいとリクエストしてきた。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

アニメ化やドラマ化などの別メディア、Web 掲載の漫画や小説、SNS や動画サイトなど、他のメディアを介して本を知り、選ぶきっかけとなる例は多く、その入り口も多岐にわたっている。

事例 123 では、Web 上の漫画作品をきっかけに、関連図書へも興味を広げている。

特に本に日常的にふれていない子どもにとっては、本以外の様々なメディアが、本選びのための大きな場となっていると考えられる。

事例 124 では、動画サイト等で入手した情報がきっかけで本を選んでいることがわかる。

事例 125 ではアニメの原作となった本を読もうとしている。事例 124 や 126 では、既に作品自体は Web 上で読んでいる可能性もあるが、さらに紙の本でも読もうとしている。既知の物語を読みなおす（あるいは続きを読む）楽しみは、他の年齢層で挙がっていた「知っている本を選ぶ」、あるいは「繰り返し楽しむ」こととつながっているのかもしれない。

⑤　自分の年齢がタイトルになっている本を選ぶ

【事例 127】自分は今 14 歳だから、とタイトルに 14 歳とついている本を選んで借りていた。（公共図書館・2010 年代・中学生）

自分とのつながりを感じる本を選ぶことで、より親近感をもって読むことができる。年齢のほかにも部活や趣味、地域など、様々な共通項が考えられる。

⑥　好きな本を選ぶ

【事例 128】学校図書館で夏目漱石の『こころ』（夏目漱石著）を借りて読むと、文章がとても読みやすかった。そこから夏目漱石を読み始め、他の作家にも広がった。（家庭・2010 年代・中学生）

自分が好きだと感じたら、そこからつながって次の本に手をのばし、興味をさらに深めている。他の年代でも同様の事例があったが、中高生になるとその広がりや深まりが一層大きいように見える。好きなものつながりだと、手も伸ばしやすいだろう。

⑦　学校司書に推薦された本を選ぶ

【事例 129】本好きな子にこれ読んでみてと『妖精ディックのたたかい』（K.M.ブリッグズ作　山内玲子訳　岩波書店）を手渡した。返却時「こういう本、好きです。自分じゃ、わからないから…」と伝えてくれた。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

司書をはじめとする「人」からのお薦めや紹介には、これまでの経験では見いだせなかった本とのであいがある。それによって、さらに次の本の世界を広げることもできる。

⑧　家族の本を読む/家族で本を薦めあう

【事例 123】姉が近代文学を元にした WEB マンガを読んでいたため、自分も読み始めた。（家庭・2010 年代・高校生）

【事例 130】我が家の 3 人の子ども（24 歳女、21 歳女、17 歳高校生男子）がいる。高校生（の弟）が、姉二人に「面白い（紙の）本はない？」と尋ねると、決まってすぐに何冊かの本を薦めるのは、長女。長女が買い求めた紙の本を息子は読んで楽しんでいる。さらに我が家には読書好きの父親が無造作にあちこちに本を置いている。子どもたちは、父親に本を薦められ、同じ本を読んだ感想を言い合っている。それぞれ好きな漫画があり、電子書籍でも紙の本でも薦めあっている。（家庭・2020 年以降・高校生）

家族が読んでいる本は、共有もしやすく、最も身近である。薦められなくてもその場にあれば手に取ることもできるし、本の話もしやすく薦めやすい。「読む」家族の存在は、本を選び、読むうえでは大きな強みだろう。

2.4.2　どのように読むか

①　多読でスピードが早い

【事例 131】毎日 3 冊ずつ借りて行く子がいた。ずっと本を読んでいるらしい。ものすごいスピードで。中学生も読めるような大人の小説から YA（作品）まで手渡していった。（学校図書館・2010 年代・中学生）

読むことが生活の一部になってしまうと、読み慣れることでスピードも上がり、読む量もどんどん増えていくのだろう。とにかく貪欲に読んでいる様子が見える。報告者はもっと知識があればさらにたくさんの本をすすめられたのに、と述べている。

② 隙間時間に読む

【事例 122】電子辞書を授業中の隙間時間にいじって収録されている文芸作品を読んでいた。太宰治、梶井基次郎など短編をよく読んだ。（家庭・2010 年代・高校生）

中学生以上になると、放課後も様々な活動でより忙しくなってくる。そのなかで、自分で時間を編み出し、読書を楽しんでいる。

2.4.3 その他

本を選ぶ、読むに該当しない事例をここでは取り上げる。

① 現物で可視化することで読書量を確認する

【事例 132】電子書籍では何冊読んだか一目でわからない。紙の本だと、積み重ねて置けるので、冊数が増えると達成感を感じる、との意見があった。（家庭・2020 年以降・中学生）

紙の本という「もの」の存在が読書の実感を得やすくしている。事例 132 では何冊も読んだことの達成感を挙げているが、1 冊の本を読み進めるときにも、紙の本はページの厚みで「ここまで読んだ」という実感が得られる。

② 本の感想を伝える、共有する

【事例 129】本好きな子にこれ読んでみてと『妖精ディックのたたかい』を手渡した。返却時「こういう本、好きです。自分じゃ、わからないから…」と伝えてくれた。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

【事例 130】我が家の 3 人の子ども（24 歳女、21 歳女、17 歳高校生男子）がいる。高校生は、姉二人に「面白い（紙の）本はない？」と尋ねると、決まってすぐに何冊かの本を薦めるのは、長女。長女が買い求めた紙の本を息子は読んで楽しんでいる。我が家には読書好きの父親が無造作にあちこちに本を置いている。子どもたちは、父親に本を薦められ、同じ本を読んだ感想を言い合っている。（家庭・2020 年以降・高校生）

本の感想を推薦者などに伝え、共有する事例。事例 129 では本にであえたうれしさを推薦者に、事例 130 では家族でそれぞれ本を楽しみながら、時に薦めあったり、感想を言い合ったりしている様子がわかる。個人での読書だけではなく、それぞれの読書体験を共有することによるコミュニケーションを楽しみ、また次の読書へもつないでいる。

③ 読みたい本は、すぐに手にしたい

【事例 120】（ネットの「中学生向け〇〇な気分の時に読みたい本」などのサイトや、YouTuber によるお薦め動画はあまり使わないとのこと）。理由を尋ねると、ネットや YouTube でお薦めされている本は、予約がたくさんあったり借りられていることが多いので、読みたいと思っても読めないことが多いからとのことだった。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

読みたいときにすぐ読めない事態を予想して、あらかじめ Web を本選びの情報源から外している。「待つ」こと、あるいは待っている間に自分の読みたい気持ちが変わることを避けたいのかもしれない。

④ 読書の好みが確立している

【事例 133】（動画やサイトなどで）誰かのお薦めしているものは、その人と自分の趣味が合うか分からないし、自分で自分の面白いと思うものを選びたいとのことだった。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

自分の本の好みがある程度確立されていて、情報収集も選ぶ際にも、その判断基準に重きをおいていることがわかる。この世代だと様々な場面で自分の好みがはっきりしてくるだろうが、読書の好みに関しては、それまでの読書経験も影響してくると考えられる。

⑤ 本の出来事を現実の世界で再現する

【事例 134】「アーサー・ランサム全集」（神宮輝夫訳　岩波書店）の棚の前で制服姿の高校生が 3 人、話をしている。ナンシー、スーザン、ペギー、ティティと漏れ聞こえ、訊いてみると、自分たちそれぞれに名前をつけている由。（公共図書館・1980 年代・高校生）

物語をより楽しむために、現実世界で模倣や再現でその世界を広げている。本事例は 1980 年代のものだが、今も作品のファンがそれぞれに創作やコスプレ、聖地巡礼、研究などで楽しむ事例は多数あり、好きになった作品を味わい尽くす姿は共通する。

⑥ 電子書籍で読んでも紙の本で読みたい

【事例 126】「小説家になろう」のような無料で読める電子書籍を書籍化した本のリクエストを受ける。サイトで書籍化を知って、本で読みたいとリクエストしてきた。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

【事例 130】子どもたち 3 人は、まず電子書籍で漫画を読み、とても面白かったものは「紙で読みたいから」と紙の本で購入している。（家庭・2020 年以降・高校生）

【事例 135】「スマホでタダで読めるけど、やっぱり本で読みたいんだよね。」と言って、‘小説家になろう’（投稿型の小説サイト）から書籍化された本を借りていった。（補足）本人に発言の真意を確認したところ、紙の本が好きとのこと。匂いとか手触りとか。書籍化で内容が変わったりすることがあるが、それが理由ではないとのことだった。（学校図書館・2020 年以降・中学生）

電子書籍で読んでいても、あえて紙の本を選んで読もうとする事例が複数あった。紙と電子では、内容が同じでも違う「読書」だと受けとめている、とも考えられる。

事例 135 ではものとしての実感を求めて、紙の本を希望している。事例 126 や 130 ではその理由までは見えないが、まとまって読んだり、繰り返して読んだりする際の読みやすさから紙の本を求めているのか、事例 130 については手元に「自分のもの」として置くために紙の本がいいのか、確かめたいところである。

⑦ 物理的な条件で電子書籍を選ぶ

【事例 136】高校 3 年生。県外への進学が決まり、一人暮らしをすることに。大好きな（思春期を共

に過ごした）本達を、持って巣立ちたかったが、物理的に難しいため、タブレット端末を購入。好きな本は、電子でタブレットに詰め込んで、新生活をスタートさせた。（家庭・2010 年代・高校生）

⑥の事例とは対照的に、こちらはあえて電子書籍を選んでいる。目的は手元に置くために物理的な量を減らすこと。自分の身近に好きな本を置くことを優先させて、電子書籍のメリットを活かしている。

3. アンケートの回答事例から紙の本と電子書籍を考える

ICT（情報通信技術）の普及は、人びとの生活を大きく変え続けています。特にスマートフォンなどの携帯端末やSNS（ソーシャル ネットワーキング サービス）の普及は、人と人とのつながり方にも大きな変化をもたらしました。

図書館におけるICTの活用は、書誌情報の検索や資料利用、デジタルアーカイブの構築などサービスの充実に不可欠なものとなっています。新型コロナウイルス感染症拡大や、国の進めるデジタル化推進を背景にして、電子書籍を導入する公共図書館が増加しています。学校での探究的な学習などでもインターネットやデータベースの活用が進んでいます。また、電子書籍を読むためには、デバイスの確保が必要となりますが、GIGAスクール構想により小・中学生への１人１台端末がほぼ実現し、小学生でも利用が可能になりました。

子どもにとっての電子書籍を考えるためには、俯瞰的な視点と読者である子どもからの接近が必要です。俯瞰的な視点では、印刷からデジタルへという歴史的な変化をみてとることができます。また、電子書籍は、どこからでもアクセスが可能であるという利便性があり、紙の本では読めない、読みづらい子どもへの読書を可能とします。保存のためのスペースが要らないことなどもメリットです。

一方、電子書籍を考えるためには、子どもの読書実態からの接近が必要であり、今回のアンケートは、その視点から考えていこうとするものです。私たちは電子書籍を含めて、読み手である子どもがどのように本を選び、読んでいるのかの事例を集め、整理し、分析することで、子どもにとっての読書の意味を考えようと試みました。このことから公共図書館や学校図書館で、紙の本や電子書籍をどのように位置づけるのか、アンケートの回答事例から紙の本と電子書籍の特徴を把握し、このことを考えてみたいと思います。

3.1 紙の本の特徴

子どもはどのように本を選び、読んでいるかの回答を読んでいくと、その特徴は、「もの」としての紙の本であることが分かります。以下、「もの」としての特徴から子どもと読書の関係を考えてみます。

（１）現物の表紙や判型などが選ぶ手がかりになる

「絵本を読んであげるよと 3 歳の孫にいうと 5～6 冊の絵本をもってきた。どれから読むかというと、絵本を床に広げだした。自分なりの面だし、フェイスアウトを行い、読む順番を決めていた。」という事例です。絵本を広げるほうが選びやすいのです。

小学校低学年では、学校図書館や公共図書館で行われる面展示から本を選んでいます。平面としての本というよりは、判型、厚さなどの要素も加味されていることと思います。

判型が普通の本と同じ本（『はじめてのキャンプ』や『みどりいろのたね』）をよく借りていく子どもがいて、ページ数があり「大きい子の読む本みたいで好きだった」と回答しています。本の判型と自分の成長が共鳴し合っているのです。

小学１年生の男の子は「字がたくさんある本を読みたい」と学校図書館に来て、本をめくりながら字が多く、なおかつ自分が読めそうな本を選んでいます。紙の本を開いてみると、字の大きさ、字の多寡、挿絵の量、そして本の厚さなどから全体像を一瞬に把握することができます。

中学生になると、大人でもよく行う選び方を行っています。「書店や学校図書館、公共図書館で展示してあるものや本棚にあるものからタイトルや表紙が気になるものを抜き出し、中身を少し読んでみて興味が持てるかどう

か」で選んでいます。「もの」としての本が発するあらゆる情報を選ぶ材料にしていることが分かります。このように年代に関わらず子どもは、表紙や判型など「もの」の特徴を手がかりとして読書に入っています。

回答からは出てきませんでしたが、絵本であれば、横長や縦長、大きさもさまざまです。絵本作家は通常、この内容であればこの判型をというように決めています。形がキャンパスであり表現の一つなのでしょう。絵本だけでなく子どもの本は、様々な形をしています。このことも紙の本の特徴です。

（2）読書の量を確認することができる

中学生の事例で「電子書籍では何冊読んだか一目でわからない。紙の本だと、積み重ねて置けるので、冊数が増えると達成感を感じる。」との報告がありました。私たちはよく「今日はここまで読んだ」としおりを挟みます。「もの」としての本はどこまで読んだのか、残りも厚みで分かります。言葉をかえれば、「紙の本」という「もの」の存在が読書の実感を得やすくしているのだろうと思います。

電子書籍では、文字の大きさを変えることができるというメリットがあります。その結果、ページ数という概念は曖昧になります。全体の「〇〇〇分のいくつ」という表示は目安になりますが、電子書籍を読んでいると一体、自分はどこを読んでいるのだろうかと不安になることがあります。それは、電子書籍では全体の読書量を把握することができないからです。

（3）宝物になる

「小学 6 年生の時、たまたま家の本棚に並んでいた『モモ』をなんとなく手に取り読み始めた。冒頭から引き込まれて読みふけったが、あまりの面白さに、ずっとこの物語の世界に浸っていたいと思い、後半以降は、ページの残りを気にしながら、毎晩少しずつ読んだ。子ども心に、この本はこれまでに読んでいた本の隣には並べたくないと感じて特別の場所を作った。」という事例がありました。これは 1 冊の本とのであいであり、それを今まで読んできた本と別に扱い棚に並べているのです。『モモ』という物語が本という形になり、それを宝物として大切にしている姿が伝わってきます。

「『じゃあじゃあびりびり』を甥が誕生した時にプレゼントした。甥は 4 歳になっても、おもちゃ箱に入れて大切にしていて、私に楽しそうに読み聞かせをしてくれた。」という報告があり、幼児でも自分の本を宝物にしています。

『モモ』の事例では、ストーリーやテーマという内容と、装幀、製本を含めて「もの」としての本が子どもの宝物になったのだろうと思います。『じゃあじゃあびりびり』は、生後数か月で読んでもらいお気に入りだったのでしょう。歯形が付いているかもしれません。おもちゃ箱にしまう大切な宝物なのです。「もの」としての本へのこだわりは、乳幼児だけでなく、大人になっても続くものだと思います。

宝物ではありませんが、子どもが「もの」としての本にこだわる事例がありました。公共図書館で時たま見かける事例です。「カウンターで、母親が子どもの選んだ本をみて、「その本、家にあるじゃない」という。子どもはどうしても借りたいのか、本を胸に抱きしめ、言い返す言葉を探していた。「その本好きなんだね」と助け船をだすと、子どもはこっくりとうなずいた。母親は解せない様子だったが、諦めてその本も一緒に借りて帰った。」は、学齢前の子どもの事例です。家に帰って自分の本と本当に同じかを確認したいのかもしれません。

（4）人に薦めやすい

今回のアンケートでは、一人の子どもが図書館などで本を選ぶという事例以外に、祖父母、親、きょうだい、友だち、図書館員、文庫のスタッフ、ボランティアらとの関係の中で本を選んでいることが分かりました。図にするなら「子ども↔本↔他の人」ということでしょうか。紙の本をとおして人が影響し合いながら本を選び、読み進めて

います。

「『時計坂の家』を手にしてじっと表紙を見ていた子に、横から友だちが「たかどのほうこかなあ？」と声をかけていた。厚い本に躊躇していたが、高楼方子にすすむきっかけになっていた。」という学校図書館での小学校高学年の事例です。この事例からは、書架の前に二人が立ち、友だちからの一押しが１冊の厚い本に結びついていることが分かります。

中学校の学校図書館でも学校司書が「本好きな子にこれ読んでみてと『妖精ディックのたたかい』を手渡した。返却時「こういう本、好きです。自分じゃ、わからないから…」と伝えてくれた。」という事例がありました。ここでは「子ども↔本↔学校司書」の形ができています。この事例のような薦め方は、電子書籍でもできそうですが、紹介する本があると、両者はより薦めやすく、受け取りやすくなると思います。

教室で行われるブックトークでも「もの」として本は紹介しやすいと思います。「子どもどうしでグループを作ってブックトークをした。紹介された本を、子どもたちはよく読んだし、その後、本を自分で選ぶ際にも、作者つながり、テーマつながりで探す姿があった。」との回答がありました。小学校中学年の事例です。

家族で薦めあうという事例もありました。「我が家の３人の子ども（24 歳女、21 歳女、17 歳高校生男子）がいる。高校生（の弟）が、姉二人に「面白い（紙の）本はない？」と尋ねると、決まってすぐに何冊かの本を薦めるのは、長女。長女が買い求めた紙の本を息子は読んで楽しんでいる。さらに我が家には読書好きの父親が無造作にあちこちに本を置いている。子どもたちは、父親に本を薦められ、同じ本を読んだ感想を言い合っている。それぞれ好きな漫画があり、電子書籍でも紙の本でも薦めあっている。」というものです。この家庭では、それぞれの本がいろいろな所に置かれ、それらを家族で共有しています。そして、そこに「薦めあう」という会話が生まれています。電子書籍の漫画も薦めあっているようですから「人（複数）↔紙の本・電子書籍↔人（複数）」という関係でしょう。

読書は、一人で選び読むという形が基本ですが、アンケートの回答からは、本を選ぶ多くの場面で第三者の存在が影響していることが分かりました。言葉を替えれば、外からの刺激、働きかけということでしょう。それは紙の本でも電子書籍でも変わらないと思います。しかし「薦めあうことができる」という視点からみていくと、本という「もの」がある場合、手渡しができる、少しのコメントでも伝わるという良さがあります。一方、今回の回答ではありませんが、電子書籍の場合でも紙の本と違った薦めあい方が今後、でてくるでしょう。

（5）周りの人とのコミュニケーションを取りやすい

アンケートでは、本をとおして周りの人とのコミュニケーションを楽しむ姿がたくさん報告されました。特に乳幼児期では、本よりもコミュニケーションが先にあり、その道具としての本があるようにすら思えます。

一番年齢が若い子どもの事例では、「娘が二人目を出産し、実家に帰ってきた。5 歳のお兄ちゃんは、はじめはどう対応してよいかわかりかねていたが、突然本棚から『だるまさんが』を取り出し、自分もあお向けになって赤ん坊に読み聞かせを始めた。」というのもありました。生まれて１週間しかたっていない弟とどうコミュニケーションをとってよいか分からない兄がとった行動です。この子は読み聞かせをとおして人同士が通じ合うと理解しているのだと思います。

幼稚園からは、保育中に読み聞かせた絵本の数冊を家庭で買ってもらい、「「先生と同じのを本屋さんで買ったよ」「同じの、持ってるー」と嬉しそうに教えてくれた」との事例が報告されました。本そのものというより、先生と同じ本を買ってもらったことを伝えてたくてしょうがない姿が見えてきます。公共図書館でも、「カウンターで、5 歳くらいの女の子が『モチモチの木』を持ってきて、「おじいちゃんがおなかいたくなって、おいしゃさんにつれていくねん」「この木がぴかぴかするねん。ここ読んで」といろいろ話しかけてきた。」とのことです。「読んでもらいたい」気持ちより、図書館員と内容を話したい、共有したい気持ちが伝わってきます。

小学校低学年の事例でも「『もりのへなそうる』を開いて見ていた男児が、「エルマーと色ちがいのりゅうがいる」と友だちに見せていた。」とコミュニケーションを取っています。

これらからは本を介在させて、会話を楽しんだり、おしゃべりしたり、気持ちを交わしたりなど、さまざまなコミュニケーションをとっていることが分かります。紙の本の場合、その相互作用がよく働くのだと思います。

（6）本の世界を、現実の世界と同等に受け止め、楽しむことができる

本の世界に参加する乳幼児の事例もたくさん寄せられました。

「『おにぎり』。自分で取る真似はしないが、こちらが取る真似をして口に差し出すと食べようとする。」は、絵本に描かれたおにぎりを本当のおにぎりのように扱っている事例です。「『ねないこだれだ』のネコを指差して触る。本物のネコに触るように、ちょんと触ってすぐ手を引っ込めてニヤっと笑う。実物のネコを触る時と同じやり方だった。」「『バナナです』ひたすら絵のバナナを食べる真似をして遊ぶ。」、汽車がでてくる「『がたんごとんがたんごとん』では、本を開いて、読んでもらう時にがたんごとーんがたんごとーんと体をゆらす。」など乳幼児は本を楽しんでいます。

また、『バナナです』の事例は、「「お母ちゃんにもちょうだい」と言うと、私にも食べさせてくれるし、「くーまちゃんも欲しいって」と言うと、くまのぬいぐるみにも食べさせる。」と続きます。本とのコミュニケーションから親とのコミュニケーションになり、ぬいぐるみが登場することで、絵本を介在した遊びにも発展しています。

このように幼児の読書には、絵を食べるふりをしたり、においをかいだり、さわったりして、本の世界を現実と同じように感じ、楽しんでいます。このことは子どもにとって大切なことでしょう。

（7）「本」の世界と「遊び」とを融合する

本を遊びに使う事例も複数ありました。たとえば、『のせてのせて』。絵本のない時に『のせてのせて』の話をする。（そうじきにのっていたので車のつもりだったのかもしれない）「みんなのった！」とか「トンネルトンネル、まっくあまっくあ」とか言いながら遊ぶ。1 歳 9 ヶ月の幼児の事例です。

また、「2 歳の男の子が、福音館書店のブルーナの絵本を書架から大量に出してきて、タイルのように敷き詰めたり、積み木のように積み上げたりしていた。2 つ上の姉が本を読んでもらっておもしろそうにしているのを知っているので、自分も本をさわって、関わりを持ちたかったらしい。片付けようよ、と声を掛けたら、「だめー」と本の上に覆いかぶさった。」とのことなどです。

この子はブルーナの絵本をおもちゃのように運んだり、並べたり、積み上げたりして楽しんでいます。子どもは新しい遊びを発見します。本という形があってこそ、本への親しい気持ちが生まれ読書の入り口になることもあると思います。

（8）記憶を呼び起こす助けになる

「もの」としての本は、記憶を助けてくれます。「小さい頃から図書館に来ていて、もう 20 歳前後になる男性に、子どもの頃に読んで思い出に残っている本があるかを聞いたことがある。彼は絵本の書架に行き、『おばけのてんぷら』を私に見せて「たぶん、この絵本だったかな？」と言った。そして、匂いをかぎ「間違いない、この匂いだ」と言った。」との事例が公共図書館から報告されました。「もの」としての本には匂いがあります。紙やインクの匂いなどです。本を読んでいるときは、そこに書かれた文章や絵を読んでいるだけではない、ということがわかります。音、空気、匂い、周囲のあらゆるものを全身で受けとめながら子どもは本を読んでいるのだと思います。

公共図書館では子どもの頃に読んだ本を探すレファレンスを受けることがよくあります。多くの人は内容だけで

なく、その本にまつわる思い出を話します。「戦死した従弟からもらった」、「父親が出稼ぎのお土産に買ってきてくれた」、「家にあった」、「姉と一緒に読んだ」、「仲の良い子に教えてもらった」、「学校図書館で何度も借りた」、「母親が小さいいとこにあげてしまった」などです。その人にとって思い出の本は、自分の思い出そのものに結びついているのです。

本の特徴を聞くと、赤っぽい本とか、このぐらいの大きさなど、「もの」としての本の特徴がでてきます。本には、記憶を、本を読んでいたころの記憶ー子どもの頃の暮らしや家族、友だち、或いは悦びや悲しみ、寂しさなども呼び起こさせる力があるようです。

報告書をまとめるにあたり、調査メンバーから、上記のレファレンス事例のほかに「日比谷図書館にいたときに年配の婦人が『イワンの馬鹿』を探しに来られて、装丁の記憶から求める本を手渡すことができました。私が「〇〇町の古本屋さんで買っていますね」と何気なく言ったら、その方が、真顔になって「この本は私の本ではないでしょうか？ 姉と一緒に読んだのです」と言いました。真剣な様子に一瞬本当にそうかもという気持ちにもなりましたが、本を手にすることで一気に記憶がよみがえったのでしょう。その方は、後日娘さんを連れて再訪し、娘さんにも読ませていました。」という報告がありました。

（9）五感を刺激する

『おばけのてんぷら』を匂いで記憶していた事例を紹介しましたが、匂いは「嗅覚」です。ここまでの事例でも『おにぎり』『バナナです』で子どもは、紙に描かれた対象に手を伸ばし、掴み、口に入れるまねをしています。『くだもの』のように見開きに描かれたリンゴなどに「さあ、どうぞ」の文章が付けられ、手に取るように意図して作られた絵本もあります。ここでは絵本に触るという「触感」が働きます。ページをめくるのも触感です。読み聞かせをすると、早く次のページを自分でめくることが多々あります。絵本のなかにはページの途中に穴が開いている絵本もあります。子どもは必ずと言ってよいほど指を突っ込み確認します。これらも触感です。

『じゃあじゃあびりびり』を宝物としている事例がありましたが、この絵本は、子どもが口に入れることを前提に角を丸くしています。まるで歯固めのようです。味はしないと思いますので「味覚」には繋がりませんが、それに近いものを感じます。親からの読み聞かせは、「聴覚」です。機械音でなく、親しい人の声は安心感と満足を与えるでしょう。絵や文字を見るのは「視覚」です。「もの」としての本は、子どもの五感に働きかけていることがわかります。

紙の本と電子書籍は、読者としての子どもからみると五感を使うかどうかで大きな違いがあります。子どもは身体性、特に五感を駆使して内容を理解し、楽しんでいるのだと思います。そのことは、子どもの成長にとって大切なことでしょう。

五感は乳幼児ばかりではありません。中学生で「紙の本が好きとのこと。匂いとか手触りとか。」という回答もありました。

特徴を整理すると、紙の本は、

① 現物の表紙や判型などが選ぶ手がかりになる
② 読書の量を確認することができる
③ 宝物になる
④ 人に薦めやすい
⑤ 周りの人とのコミュニケーションを取りやすい
⑥ 本の世界を、現実の世界と同等に受け止め、楽しむことができる
⑦ 「本」の世界と「遊び」とを融合する

⑧　記憶を呼び起こす助けになる
⑨　五感を刺激する

3.2 電子書籍（YouTube などのデジタルメディア含む）の特徴

ここからは電子書籍などの事例から子どもの読書を考えていきたいと思います。このアンケート調査は、2022年１月から２月までが回答期間なので、回答内容はそれ以前の事例ということになります。学校ではGIGAスクール構想が具体化し、小学生・中学生に１人１台端末がほぼ行き渡ったころです。そのため、この調査ではデジタルメディアを使った事例は多くありませんでした。そのことも考慮して考える必要があります。ここでも「3.1 紙の本の特徴」と同じように回答から特徴をみてみたいと思います。

（1）普段、居る所で手に入る

「姉が近代文学を元にしたWeb漫画を読んでいたため自分も読み始めた。そこから近代文学に興味をもつようになり、調べているうちに青空文庫を知った。」との高校生の事例がありました。Web漫画と青空文庫で近代文学を読んでいるのです。

また、「電子辞書を授業中の隙間時間にいじって収録されている文芸作品を読んでいた。太宰治、梶井基次郎など短編をよく読んだ。」とも回答がありました。どちらも電子書籍を抵抗なく利用しています。本を公共図書館や学校図書館、書店などに求めずに電子書籍を読んでいます。電子書籍は家や学校の教室など、普段、居るところで手に入れることができます。公共図書館や学校図書館で電子書籍を導入すると、同様の回答が多くなってくるでしょう。

（2）紙の本に進む入り口になることがある

電子書籍を入り口として紙の本も読むようになった小学校高学年の事例がありました。「コロナ禍で休校になったため Kindle を購入。Unlimited（読み放題）を契約。読んでいた本は、ドラえもんなどの漫画、角川つばさ文庫。2021 年３月（小 6）、Unlimited 無料が１年間で終了。ベネッセのタブレットを使用していたので「まなびライブラリー」を読み始める。角川つばさ文庫やノンフィクションなどいろいろ。」と電子書籍を読んでいます。また、「加えて紙の本も手に取るようになる。」と回答しています。「紙の本では、『ペニーの日記読んじゃだめ』」を読んでいます。その後、中学１年生になり「名探偵カッレくん」シリーズ、『ワンダー』」を読んでいたと回答しています。

報告者は、「娘は「細かい文字は苦手」と言っていたのでディスレクシアかと思ったこともあった。今はそのような困難さは見られません。（コロナ禍で休校になり Kindle を購入）ただ、電子で読んで文字の大きさをかえたりしながら読むことに慣れていったのかもしれない。紙の本に最初苦手意識がある場合、電子もなんらかの助けになるのかなと感じている」とコメントしています。この事例からは、電子書籍を読むことで読書に興味をもち、並行して紙の本も読むようになっていることがわかります。

小説の投稿サイトを読み、書籍化された本を読むという事例もありました。書籍化されるのは、投稿サイト内にあるたくさんの小説のなかでも編集者が内容や販売予測を加味し判断したものでしょう。学校図書館（中学校）からの回答で「「小説家になろう」のような無料で読めるものを書籍化した本のリクエストを受ける。サイトで書籍化を知って、本で読みたいとリクエストしてきた。」とのことです。この事例は、書籍化されたことで学校司書が知ったわけですが、リクエストした中学生は普段、無料の投稿サイトで小説を読んでいるのだと思います。

また、別の中学生について「「スマホでタダで読めるけど、やっぱり本で読みたいんだよね。」と言って、「小説

家になろう」から書籍化された本を借りていった。本人に発言の真意を確認したところ、紙の本が好きとのこと。匂いとか手触りとか。書籍化で内容が変わったりすることがあるが、それが理由ではないとのことだった。」との報告もありました。これらは、電子書籍や投稿サイトを入り口として紙の本にも進むことがあるとの事例です。

（3）YouTube や SNS のおすすめ本を読む

小学校高学年、中学生では、YouTuber の紹介から紙の本を求めている事例が複数出てきました。YouTube はテレビを観るように子どもたちの生活に入り込んでいます。YouTube から情報を得て、紙の本に進むのも自然な流れなのでしょう。YouTube だけでなく、インスタグラム等の SNS も情報源になっています。

公共図書館の事例では「YouTuber が紹介していた自己啓発本を小学生が探していた。」（高学年）とのことです。特定の YouTuber を信頼し、その人が薦める本を選んでいます。

YouTuber の紹介する本を読むのは中学生でも同じです。「YouTuber や YouTube と連動した本は男子にも女子にも好まれ、おすすめ本に選ばれることも多い」という学校図書館の事例がありました。小学校高学年や中学生では、スマートフォンの利用も増え、それを入り口にした読書がはじまっています。

この YouTube などから本に入っていく形で、その広がりを示す中学校の事例もありました。「（ネットの「中学生向け〇〇な気分の時に読みたい本」などのサイトや、YouTuber によるおすすめ動画はあまり使わないとのこと）。理由を尋ねると、ネットや YouTube でおすすめされている本は、予約がたくさんあったり借りられていることが多いので、読みたいと思っても読めないことが多いからとのことだった。」というものです。Web メディアの影響力の強さを垣間見ることができる回答です。

（4）無料のコンテンツを読むことができる

スマートフォンで「無料で読める漫画はいろいろ読むけど、有料のマークが出たら止める。無料のものしか読まない。」という小学校高学年の事例からは、スマートフォンで無料の漫画を読んでいることが分かります。「この先を読みたいと思うけど、お金を払うことになったら親に怒られるから…」。「誰のスマホで読むか尋ねると「親」」という回答もありました。電子書籍の場合は、読む端末が誰のものか、有料・無料などの制限があることが分かります。

このように子どもたちは無料で読める漫画や小説の投稿サイト、青空文庫などのコンテンツを読んでいます。アンケートの回答の中で対価を払っているのは、コロナ禍で通信教育会社の電子図書館を利用する事例と、高校生がきょうだいで漫画を電子書籍で読んでいるという事例でした。

（5）読み方が変わる可能性がある

電子書籍は紙の本と読み方は変わるのでしょうか。小学校中学年の姪の読み方に驚いたとの報告がありました。「コロナ禍で、某通信教育の教材で電子図書館が入っているタブレットを手に入れた。いわゆる普通の電子書籍ではないが、電子図書館に入っているグラフィックノベルみたいなものを読んでいた。その読み方がパラパラと見ると一話が短くて、はいおしまい。次の話。パラパラ、次へ…。同じ話を次々に読んでいるのかと思ったら、そうではなくて、パラパラみたら次の本、ササササと読んだら次へ…。彼女が本棚で背表紙を見て、中を見て１冊を選ぶ動きと違い、そのタイトルの飛び方、選び方のスピード感に驚かされた。」とのことでした。

このように次々と内容を選び、パラパラ見たり、ササササと読んだりというのは、タップやスワイプなどの操作を随時行いながら、本を読んでいるということでしょう。本の内容が比較できないので一概には言えませんが、ここでは紙の本との違いを見て取ることができます。身近にあるタブレットが読書の入り口になっていますが、読み方にも変化があるのかもしれません。

（6）読みの苦手な子どもに有効

小学校低学年では、動的な画像情報と音声情報をもつマルチメディアデイジーを利用している事例がありました。「低学年の頃から読みに苦手意識が強く、活字図書の読書とマルチメディアデイジーを併用しており、親の読み聞かせも続いている。」とのことです。また、音声だけのデイジーも活用されています。「デイジーだと様々なレベルのお話を楽しめるため、『冒険者たち』、『びりっかすの神さま』などを聞いていた。」と、マルチメディアデイジーから音声だけのデイジーに変わっていきます。この子は「マルチメディアデイジー」「紙の本」「読み聞かせ」の併用の時期を経て、デイジーに行き、「最近では、本好きの友だちのおすすめで、『旅のはじまり（黒ねこサンゴロウ1）』、『選ばなかった冒険』など活字の読書もしている。」と変化しています。この子は、読むことに苦手意識が強いようですが、マルチメディアデイジーとデイジーに大きな役割があったことが分かります。紙の本では読みづらい子ども、読めない子どもにとって、デジタルメディアは有効であることが分かります。電子書籍の読み上げ機能も役立つことが考えられます。

（7）年齢が上がるごとに接触が増える

今回の調査では、乳幼児期にデジタルメディアに触れたという報告はありませんでした。小学校低学年ではマルチメディアデイジーやデイジーと接触している事例が1件だけでした。小学校中学年でも事例はありませんでした。デジタルメディアとの関係を示す事例がでてくるのは、小学校高学年以降です。小学校高学年からは、電子書籍を読む事例や YouTuber からお薦め本を紹介され、その本を読む事例などがでてきます。年代別のインターネット利用については、年齢が上がるにつれて利用度が高くなると言われています。連動しているのだと思います。

特徴を整理すると、電子書籍や YouTube などのデジタルメディアは、

① 普段、居る所で手に入る
② 紙の本に進む入り口になることがある
③ YouTube や SNS のおすすめ本を読む
④ 無料のコンテンツを読むことができる
⑤ 読み方が変わる可能性がある
⑥ 読みの苦手な子どもに有効
⑦ 年齢が上がるごとに接触が増える

3.3 まとめると

（1）幼児期には、読み聞かせなど「人↔本↔人」の相互作用をとおして読書が行われています。幼児期だけでなく、回答からは子どもたちが生き生きと紙の本と接する姿をみることができました。紙の本は、五感を駆使しながら読書を行うことで「もの」としての特徴を発揮しています。特に乳幼児期や小学校低学年では、「もの」としての本の特徴が長所となって効果的に子どもに働きかけています。

「もの」という存在であるがゆえに、紙の本は、大人になってから五感を通した子ども時代の記憶として心に刻まれたり、時には成長とともに再読、再発見されたり、別の人の手に受け渡されたりします。

（2）電子書籍は、家や教室など普段、居る場所から手に入れることができます。青空文庫や電子辞書に搭載された短編小説、無料投稿サイトの小説・漫画、通信教育の電子図書館が提供する電子書籍を読んでいる事例がでてきました。時間に制約されず、移動の必要もありません。このことは読書への敷居を低くするでしょう。これらの事例の子どもたちは、スクリーンを通しての読書を受け入れているといえます。デジタルネイティブ世代が積み重なっていくと、電子書籍を受け入れる子どもたちが増加すると予想できるでしょう。

また、マルチメディアデイジーやデイジー、電子書籍の読み上げ機能は、紙の本では読みづらい子ども、読めない子どもにとって有効です。

（3）ICTが子どもたちの生活の中に溶け込んだ時代になりました。電子書籍を入り口に紙の本を読む事例や、YouTube などから出版情報を得て紙の本を読んでいる事例もありました。紙の本と電子書籍は、それぞれの良さを活かしながら子どもの読書をより推進する可能性があります。子どもたちの読書を考えるためには、このような社会状況の変化を抜きにすることはできないと思います。

（4）本と電子書籍では表現方法や読み方が変わる可能性があります。現在、多くの電子書籍は、今までの紙の本をデジタル化したものです。今後、スマートフォンやタブレットで読むことを前提にしたコンテンツが生まれてくるでしょう。今までの表現が変わるのだと思います。表現が変わると内容にも影響がでてくるかもしれません。

（5）今回のアンケートの回答からは、子どもにとっての「紙の本」の良さがみえてきました。特に乳幼児や小学校低学年の子どもたちには、本を「選ぶ」うえでも「読む」うえでも「もの」としての本は有効だと思います。そのため、電子書籍との接触は、発達段階を考慮する必要があると思います。

一方、小学校高学年以上では、デジタルメディアによる読書も子どもたちの日常の中に溶け込み、デジタルメディアから紙の本へ、またはどちらも読むという姿もみることができました。子どもたちには電子書籍の利便性も認識されています。

今回の調査では、幼い人たちが繰り返し読んだり、本で遊んだり、読み聞かせを楽しんだりする事例が多くありました。それは、本が紙であるというところに起因して生まれている場合が多いといえます。そのため、乳幼児や小学校低学年には紙の本から読書の楽しさをたっぷり体験してもらい、その後、年齢とともにデジタルメディアへの接触を増やしていく。紙の本と電子書籍の選択については、子ども自身が内容や目的による使い分けを含めて、自分にとって良いと考えるメディアを選んでいくべきだと思います。

小・中学校でのGIGAスクール構想の実現や公共図書館での電子書籍の導入など、今、大きな変革の時期を迎えています。私たちは、避けて通れないこれらの課題に対して、子どもの読書の実態から考えようとしました。多くの方々から子どもたちがどう本を選び、読んでいるかの事例を回答頂き、ここに報告することができました。いろいろな感想やご意見があろうかと思います。私たちプロジェクトのメンバーは、この報告が公共図書館や学校図書館の現場で電子書籍のことを考える参考になることを願っています。

改めまして、児童図書館研究会の調査にご協力いただき、回答を寄せて頂きました皆様、そして最後まで報告書をお読み頂いた方々に感謝いたします。

2023 年 6 月

児童図書館研究会

子どもと電子メディアを考えるプロジェクトチーム

井元有里	藤沢市立高谷小学校
護得久えみ子	東京子ども図書館
沖野雄一	世田谷区立図書館
汐﨑順子	
島 弘	日本図書館協会児童青少年委員会
須賀千絵	実践女子大学
杉山きく子	
鈴木史穂	福島県立図書館
奈良史香	杉並区立済美教育センター
矢野智美	さいたま市立大宮国際中等教育学校